釣り針の先には

玄雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
釣り針の先には

【Ｎコード】
Ｎ９４１１Ｃ

【作者名】
玄雪

【あらすじ】
僕は湖の畔で釣り人に出会う。彼が拾うものは失われたもの。人は失ったものを取り戻せるのだろうか。そして人はそれを思い出せるのだろうか。

I―I　釣り人I

人は失うことを恐れる。忘却、損失。生きているうちに誰もが体験する別れ。僕は恐れる。失うことを。そして失ったことすら忘れてしまうのを、何よりも恐れる。

そしてふと思う。失われたものは何処へ行くのかと――。

彼は釣りをしていた。長い釣り糸が水面に突き刺さっている。どこにでもありそうなただの棒きれに糸を付けただけの、簡易な釣り竿だ。彼は水面を見つめている。僕の存在をまったく気にしていない。すでに声はかけた。しかし彼はこちらを見ようとしない。見ているのは水面と釣り糸だけ。彼の隣には釣り上げられた物が転がっている。それは魚ではない。はっきり言って、ただのゴミだ。どうやったらあんな釣り竿で釣れるのだろうと思う物もある。例えば泥だらけの電池。どういう形の釣り針ならあんな物を釣れるのだろう。さらに額縁に入った絵。かなり大きく、釣り針が引っかかる場所なんて無いに等しい。さらには自転車のタイヤまである。この湖の底には、その美しさからは想像できないくらいゴミが積もっているのだろうか。

ぼんやりとそんなことを考えていると、森を包む静寂を破る声がした。

「いつまで、そうしているんだ？」

それが彼の第一声だった。

「君が何か言ってくれるまで」

「なぜ？」

「僕はこれからどうすればいいのかわからないから」

釣り人はため息をついた。

「つまり君は僕に何かしてほしい、もしくは何をすべきか教えてほしいんだね？」

その通りだと答えると、彼はその場から立ち上がった。そして積み上げられていたがらくたを縄で縛った。それから彼は森に向かって笛を吹いた。犬の訓練に使われるような笛の音は、何のメロディーも奏でず、一つの音だけをはき出す。

すると、まるでそれを待っていたかのように木の陰から大きな獣が現れた。僕が知っている生き物の中で一番近いのは馬だろうか。大きさは馬くらいで、蹄もあった。しかしその耳は先が尖っていて長く、額には赤い宝石のような物が輝いている。尾は牛に似ているが、毛の色は黄緑に近い。しかし首元の毛とたてがみだけ白い。こんな生き物は見たことも聞いたこともない。

四本足の獣は釣り人に寄り添うように並んだ。釣り人が獣の首を掻いてやると、獣は猫のように喉を鳴らした。釣り人はがらくたを獣の背に乗せ、初めて僕の方を見た。

「とりあえず一緒に来て」

そう言って彼は獣と一緒に歩き始めた。僕は何も言わず、彼の言葉に従った。

僕が最初に見たのは、森に囲まれた美しい湖。最初に会ったのは、先の尖った麦わら帽子を被った釣り人だった。

Ⅰ―Ⅱ　釣り人Ⅱ

村の中は、まるで早朝の住宅街のように静まりかえっていた。村の中を歩く人は僕たちの他にはおらず、僕たちの足音を打ち消している、蹄が石畳を叩く音だけが響いていた。釣り人は村の隅にある家の前で立ち止まった。

釣り人は僕に先に入るよう言い、自分は家の裏へ向かった。僕は言われたとおりにした。木製の戸は何の抵抗もなしに僕を迎え入れた。家の中はキャンプ場にあるコテージに似ていた。この家の主は必要最低限の物しか置かないらしい。がらんとした部屋は、まるで世界に自分一人しかいないように思わせた。

部屋の主（であろう人物）はすぐに戻ってきた。彼は部屋を見回していた僕に椅子にかけるよう言い、自分自身は机の縁に腰掛けた。机も椅子も一人分しかない。食器棚に入っている食器も全て一人分だ。彼は客が来ることなど想定していなかったのだろう。一人分しかない家に、こうやって二人の人間がいることは、ひどくおかしな感じだ。

彼は帽子を取った。初めて見る彼の顔は思っていたよりも幼く、あの獣の毛と同じ色の眼をしていた。しかし彼から出る雰囲気は、彼自身を見た目よりも年長に見せていた。そしてそれよりも僕はなぜか、その顔が懐かしく思えた。見たこともないはずの顔を、僕は無遠慮に見つめた。彼は僕の視線を全く気にせずに話し始めた。

「ここは君のような人間が来るべき場所じゃない」

知っている。ここは僕が来るべき場所ではない。ここに僕の居場所はない。しかし、僕はここに来るしかなかった。僕はここに来る目的を持っている。

「君はここがどういう場所なのかを知っている」

僕は何も言わずにうなずく。

「でもここでの生き方を知らない」

ぼくはまたうなずく。
「そして君は目的を持ってここに来た」
彼は僕の返事も待たずに続ける。
「しかし、その為に何をすべきかを知らない。だから僕に声をかけた」
「その通りです」
僕はいつの間にか敬語で話している。
「そしてあなたは僕の目的を知っています」
彼はうなずく。そして敬語で話さなくてもいいと言う。彼は僕が何も言わなくても、僕の名前を知らなくても、僕の目的を知っている。そしてその理由も知っている。彼は大きなため息を吐いた。
「僕は君に何かをしなければならない立場ではない。しかし、君を放っておくことはできない。なぜなら、僕が君にとって、最初の人物だからだ」
僕がすまないと言うと、彼は謝らなくて良いと言う。そしてさらに言葉を続ける。
「だが、僕は君の目的を手伝わない。質問には答える。答えられるものには」
そして答えても良いと思うものだけ――。
僕はわかっていると答える。それで良いと、彼は満足したように言う。そして帽子を被り、立ち上がった。
「これから君を、君が住んでも良い場所に連れていく。文句は言えない。わかるね？」
わかると僕は答える。彼はそれを確認すると、家の外へ出ていった。僕はその後を追う。僕は家の外に出てすぐ、最初の質問をする。
「君は僕のことをどう思っている？」
釣り人は僕の顔を見ない。
「ノーコメント」
僕の最初の質問は空振りに終わる。

Ⅰ―ⅢⅠ　倉庫

釣り人は僕を、家の外にある建物へ連れていった。その建物は大きく、高さもあった。釣り人の家が木製だったのに対し、その建物は固い壁で覆われていた。一見すると倉に見えるが、素材はわからない。コンクリートにも見えるが、はっきりとはわからない。とにかく固い何かだ。

「こっちだ」

釣り人に促され、僕は建物の入り口へ向かう。建物の隣には馬小屋のような物があり、そこには湖で見たあの獣が入れられていた。僕はここに来てからずっと聞きたかった質問の一つをする。

「あの生き物は何？」

僕の二つ目の質問に、釣り人は答えてくれた。

「あれはウォルガ。ずっと昔に滅んだ民族と共に失われた神話に登場する神獣だよ」

釣り人は建物の中へ入っていった。僕はその後を追う。

「どんな神話なの？」

背中にぶつけられた質問に、彼は振り返らずに答える。

「後で教えるよ」

僕は今まで知らなかった神話に期待を膨らませた。

建物の中は埃っぽく、窓一つない部屋は薄暗い。釣り人はランプに火を点けた。僕は明るくなった部屋を改めて見回す。どうやらここは倉庫のようだ。統一性のない物がたくさん置かれている。食器・絵・本・トランク・枕・服など、家財道具から一本の鉛筆まで。中にはガラクタとしか言えない物まで。拳銃や刀のような危険物もある。人の骨らしき物が見えたが、見なかったことにする。部屋の手前には先程、釣り人が釣り上げてきた物が積み上げられたいる。

「ここにある物は君が釣り上げてきた物なの？」

「僕が拾ってきた物だ。先約の無い物なら、持って行っても良い」

「先約？」
「後で説明するよ」
そう言って釣り人は部屋の隅にある階段から、二階へと上がっていった。釣り人が暗闇の中に消え、足音が聞こえなくなるのを確認してから、僕は階段を上り始めた。階段は殆ど梯子に近い。急斜面の階段には手すりが無く、古びた木の板が足を乗せるたびにきしむ音を立てた。
二階には、一階には無かった窓が二つあった――あったのかもしれないが、がらくただらけで見えなかった。部屋の手前には一階と同じようにがらくたが積まれている。だが奥にはそういった物が置かれておらず、代わりに机と椅子が一対と、簡易ベッドが置かれていた。そこだけが生活空間となっているようだ。
「ここを使ったらいい。下にある物は壊さないように、できれば触らないように」
僕は何も言わずにうなずいた。釣り人はそれに満足したようにうなずき返した。
「ここにいる間、何をするかは君が決めることだ。だけど覚えておいて欲しい」
「ここは僕の帰るべき場所じゃない。少なくとも今は・・・」
釣り人はうなずく。
「それだけわかっているなら充分だ。そして出来ることなら早く帰るんだ」
僕は「何処へ」とも訊かずに訊いた。
「それは命令？」
「忠告だよ」
釣り人はそれだけ言うと階下へ降りていってしまった。
この空間に一人の超された僕は、ベッドに仰向けに倒れ込んだ。天井の汚れを眺めながら、僕は「今」を実感する。今、僕は「ここ」にいる。名も無き世界。僕はこの世界でははみ出した存在。だからこそ僕には出来ないこともあるし、逆に僕にしか出来ないこともあ

るはずだ。僕は「ここ」から始める、そして歩き出す。失われたものを取り戻すために――――。

II－I　二人目

ここで迎える初めての朝、僕は窓から遠慮なく降り注ぐ光によって目を覚ます。一度覚醒した意識を僕は再び夢へと押しやろうとするが、太陽の光に僕の瞼は穴だらけのカーテンほどの効果しかなかった。薄っぺらい布団も僕を光から守ってくれることはできず、僕の意識はすでに眠りを忘れたかのようにはっきりとしている。仕方がなく僕は眠るのをあきらめ、ベッドから出た。

改めて見回した部屋は、昨日と変わらず埃のにおいに満ちていて、カーテンを付けていない窓は光こそ通すが、表面が曇り外が見づらい。しかし僕はこの部屋を掃除する気にはなれなかった。いつまでいるかわからないこの部屋に、清潔感は求めていない。そもそも掃除をしている暇があるかもわからない。

僕は曇った窓を開き、外の空気を部屋に入れる。部屋のよどんだ空気は外へと追いやられ、清浄な空気が部屋中を駆け回る。

空はまだ暗く、空が端から徐々に明るくなっているのがわかる。まだ夜が明けたばかりなのだ。早すぎる起床だったが、僕の心と身体はすがすがしいものだった。風は冷たく、まだ日の暖かさはない。肺に入ってくる風はこの部屋のように僕の肺を駆け回る。しかしその冷たさがどこか心地よい。僕はさらに空気を求め、窓から顔を出した。その時僕の視界に入るものがあった。釣り人だ。

釣り人は昨日のように釣り竿を肩に乗せ、片手にはかごを持っている。釣り人は僕の視線には気づかず森へ入っていった。昨日僕達が出会った森だ。僕は特に何も考えないまま外へ飛び出した。

村は静まりかえっている。まるで生きている者のいないゴースト

タウンのようだ。しかし立ち並ぶ家々には確かに生活の色が見える。この村に何人の人が住んでいるのかは知らないが、釣り人の他に人がいるのは確かだろう。彼は「先約がある」と言っていた。他人がいなければその言葉は成り立たないだろう。

僕は釣り人の跡を追って森へと向かう。森は白い霧のドレスを纏い、幻想的な姿をしている。僕が森の入り口に立った時、釣り人の姿はすでになかった。おそらく森の奥深くまで入っていったのだろう。一度は後を追って入ろうかと思った。しかしすぐに思い直した。一度しか歩いていないこの森を一人で歩くほど僕は無謀ではない。この森にどんな動物がいるかはわからない——釣り人が一人で入っている以上、危険はないのかもしれないが、ただでさえ霧に満ちたこの森で迷わずに帰ってくる自信はない。中で釣り人に会えるかもわからない。もし僕が危険な目にあったら、彼は助けてくれるだろうか。彼は僕の目的のために手を貸すことはないと言っていた。しかし本当に僕が危機にさらされれば助けに来てくれるだろう。彼は僕のことを投げ出すことができないからだ。しかしそれは間違いなく彼の機嫌を損ねることになるだろう。今僕が頼れるのは彼しかいない。そんな彼の機嫌を損ねることは決して得にはならないだろう。

僕は結局森の入り口で彼が帰ってくるのを待つことにした。彼がいつ戻ってくるかはわからないが、他にすることもないのだ。これくらい何でもないだろう。そもそも僕はまだ右も左もわからない。彼の助け無しではこの村を歩くことすらできないのだ。

僕はやることがないまま、石の上に座りぼんやりと景色をぼんやりと眺めていた。そこにそれまでなかった一つのものが視界に入った。僕の影に並ぶように現れた影。太陽がようやくその全貌を見せた頃、光を背負うようにそれは現れた。僕はその影を辿り、影の主を見た。そこに立っていたのは一人の少女だった。

「こんにちは」

「こんにちは」

僕はこの日初めて朝の挨拶を交わした。そしてそれは「ここ」に来て初めての挨拶となる。

僕が「ここ」で会った二人目の人間は少女だった。

II―II　少女I

少女は僕に微笑みかけた。僕もつられるように微笑む。
春の風のような暖かい笑顔は、僕の心を暖め、早朝の冷たい外気など忘れてしまう。
「そこ、座っていい？」
僕の隣を指さした彼女に、僕は「いいよ」と答える。
僕の隣に座った少女は、絶えず笑顔を僕に向ける。
「あなた、いつここに来たの？」
「昨日来たばかりだよ」
そう言うと、彼女は口調だけ驚いた風に変える。
「そうなの？　ずいぶん最近ね」
普通、村に知らない人間が来れば気付くものではないだろうか？
特にこんな小さな村なら。
そんな僕の心中を見抜いたように、少女は話を続ける。
「ここの人たちは他人に滅多に会わないの。家から出ることもほとんどない人もいるみたい。知っているのは自分のことぐらいなの」
なるほど。他人と干渉しない村。見るのは自分自身だけ。それがこの村の基本。ならば、釣り人は？　そしてこの少女は？
「君はどうして僕に声をかけたの？」
僕の質問にも少女は笑顔を絶やさない。
「純粋な興味よ。たまたま外を覗いたら君が見えたから、話がしたくなったの。私、この村では変わり者なのよ」
人との接触を好む者が変わり者で、誰とも触れあわない人間が普通。他人を求めて来た僕もここでははみ出し者。いや、それ以前に僕はこの村の住人ではない。いられない。僕の望みがある限り、僕はこの村の住人になることはできないのだ。

【ここは僕の帰るべき場所じゃない。少なくとも今は・・・】

釣り人との会話が思い出される。僕がもしここの住人となる日が来たのなら、それは僕が望みを捨てた日。
僕はまだ望みを諦めるわけにはいかない。

「ここで他人と関わる人は彼ぐらいよ」
僕は思考を途中で切った。少女が言った「彼」の言葉に反応したからだ。
「彼って、釣りをしている彼のこと？」
そう言うと、彼女の口調は不機嫌なものとなる。
「そうよ。彼だけ村の人たちと関わりを持っているの。何をしてるのかは知らないけど。きっとろくでもないことよ」
顔は笑顔のままなのに言っていることは全く違う。
「彼が嫌いなの？」
僕が思ったのはそのことだ。
「嫌いよ。彼は他の人たちと違う。私のような変わり者でもない。全く別の次元の人だから」
「違うから嫌いなの？」
僕の質問に彼女は顔を変えない。
「それだけじゃないわ。彼は――――」
「何してる」
少女の言葉を途中で打ち切るように割り込んできた声に僕は驚き、

森から出てきた声の主を見つける。釣り人はどこか不機嫌そうな顔で僕たちから視線をそらさず、そのままこちらに歩いてきた。僕はそこに何かおかしいことに気付く。しかしその答えが出ない。
「話をしていただけよ。悪い？」
不機嫌な口調そのままで彼女は釣り人を見上げる。笑顔なのにその目は何か強い力がこもっていた。
「別に。でも君のくだらない遊技に他人を巻き込むのはやめといた方が良い」
そう言った釣り人は、返事も聞かずに村の方へ歩き去っていった。
少女はそれをしばし見た後、立ち上がり、僕の耳に小さな声を入れた。
「彼を信用しては駄目よ。彼はいつかあなたを裏切るわ」
僕が驚きに浸っている間に少女は「またね」という言葉を残し去っていった。

追いついた僕に、釣り人は言った。
「彼女にあまり関わらない方が良い。というよりこの村の人間とあまり関わりを持たない方が君のためだ。彼女に何を吹き込まれたかは知らないが、鵜呑みにはするな」
そう言った彼は彼女が言った言葉の意味を知っているのだろうか。
不機嫌そうな顔をようやく戻した彼を見て、僕は先ほどから出ていた違和感にようやく答えを出した。

僕は彼女の笑顔しか見ていなかった。

II－II　少女I（後書き）

遅筆で本当に申し訳ありません。お心が広いかた、良ければ次話も気長にお待ちいただけると幸いです。

II―III　村

釣り人は倉庫に着くまで一言もしゃべらなかった。沈黙という空間が僕らを覆い、重くのしかかってくる。

しかしそれを感じているのは僕だけだろう。釣り人はただ前だけを見て歩いている。僕の存在すら感じていないようにだ。

表情を元に戻した彼が、まだ少し不機嫌に見えるのは僕の気のせいだろうか。今まで感情の大きな変化を見せなかった彼が始めて見せる《感情》。それが少しうれしかった。違う彼を見ることができた気がした。

しかし同時に彼を怒らせていることに戸惑いもあった。

原因は僕にあるのか、それとも先程まで会っていた彼女にあるのか。僕にはわからない。僕は彼の心を感じ取ることがうまくできない。彼の口から、表情から伝えてくれなければ僕に彼の言葉は届かない。

言葉のキャッチボールは常に彼で終わり、けっして自分のことは話してくれない。いつだって僕らの会話は僕の一人芝居だ。どんなに多くの言葉を重ねても、心が通じなければ一人でしゃべっているのと何も変わらない。

それが少し悲しい。

倉庫に着いてからも彼は何も言わなかった。森から出てきたとき、彼は朝には空だったかごは一杯に入れられた細々とした荷物――僕にはそのほとんどがガラクタにしか見えない――が入れられており、

それを倉庫の中に積み上げていく。そしてそれと入れ替えるように倉庫に積まれていた荷物の一部を外に出していく。僕はその作業を黙って見ていた。

釣り人は必要な物を出し終えると、自身も外に出る。僕はそれを追いかける。

外に出た釣り人は昨日連れていたウォルガという獣を連れてきた。ウォルガはその細く長い足をテンポ良く動かし、釣り人に寄り添うように歩いてきた。

釣り人はウォルガにソリを取り付け、そのソリの上に倉庫から出した荷物を乗せる。僕は黙ってそれを見ている。

耳に入ってくるのは風が木々を揺らす音や鳥の鳴き声などの自然の音だけ。沈黙が僕らを包んでからどれほど時間が流れてからだろうか。ようやく久方ぶりに思える人の声を聞いたのは。

「いつまでそうしているんだい？」

それは初めて会った時とほとんど変わらない言葉。しかし僕の返事はない。

「君は目的があってここに来たんだろ？　だったら何かするべきなのではないか？」

その通りかもしれない。だが僕は何をしたら良いのかわからない。何をすべきで、何をするのが最善なのかわからない。僕はこの世界で一人、目隠しをしているように手探りで歩かなければならない。そしてただ歩くだけではいけない。その途中で手に入れなければならないものがある。それを手にせず出口にたどり着いてはここに来た意味がない。僕は目的を果たすまで帰るわけにはいかない。

いや、帰る必要すらない。目的さえ果たせれば良い。

思考を停止させると、そこには釣り人の視線があった。

「一つ、いいかい？」
釣り人はようやく自分を見た僕に言った。
「この村は君がいた世界とは違う。そこに住む人間も、その思考も。君の常識では通じない世界がある」
「どういうふうに？」
僕はしばらくぶりに口を開く。
「これから見ればいい。僕はこれからこの荷物を届けに行く。そこで見たらいい。この村の異様さを。この村共通の常識なんてほとんど存在しない。すぐ隣にいてもそれぞれがまったく別の世界を持っている。みんなそこから抜け出せず、外を見ようとしない。それだけがこの村の常識。
そしてこの村で得るものは形にもならない自己満足、失うものは存在しかない。なぜならこの村は———」

捨てられた欠片の寄せ集まりでしかないから———。

II－IV　司書

釣り人が開いた扉の先には本の山が広がっていた。

僕が案内された村の中の建物。無機質な白壁と手入れもされていない庭。飾り気もない壁はコンクリート製の公共施設を思い出させる。釣り人はソリに乗せた荷物から蔵書類を取り出し、ノックも何もせずに建物へと入っていった。

彼を追いかけ建物に入った僕の鼻に古びた髪のにおいが入り込んできた。

図書館だ。それが僕の第一印象だった。

迷路のように並べられた木製の本棚とそこに入る大量の本。すべては入らず足下に無造作に置かれているものもある。

釣り人は荷物を持ったまま遠慮なく奥へと足を踏み入れていく。窓がないのかと思うくらい暗い部屋を歩くのは、かなり至難の業だった。現に、彼を追いかける僕は何度も積み上げられた本の山に躓いてしまった。釣り人は慣れたように本棚の迷路を進んでいく。僕は必死に彼を追いかける。

釣り人が立ち止まったのは部屋の一角。まるで雪崩でも起きたように積み上がっている本の山の前。

そしてその山の上に寝ころんでいる人物を見下ろしている。

暗くて醜いが、その人物が暗色の洋服を着ており、顔に本を乗せて眠っているのはわかった。

音もない図書館にただ一つ、規則正しい寝息が響いていた。

この人物が先約だろうか。そう思っていた僕の前で釣り人がしたことは、寝ている人物を文字通りたたき起こすことだった。

釣り人は持ってきた本――分厚くかなりの重さがあるだろう――を寝ている人物の上に落とした。本はドサドサと音を立てて眠り姫の身体の上に降ってきた。
グゥとうめき声を立てた人物は、腹に直撃したであろう本を下に落とし、起き上がりその顔を見せた。
「何すんだテメェ、起こすにしても、もう少しましな起こし方があるだろう」
眠り姫は眠り王子だった。目覚めのキスではなくロマンの欠片もない起こし方をされた彼の文句など釣り人は気にしていない。
「うるさい。君は来るたびに寝ているだろ。そのたびに起こしているんだから感謝して欲しいくらいだ」
そう言って釣り人は自分がたった今、彼の上に降らせた本を指さした。
「今回の分だ。全部で七冊。確認しておいてくれ」
「おお、サンキュー」
とりあえず会話が終わったようなので僕は釣り人にこの青年のことを訊きたかった。しかしそんなことするまでもなく相手は僕に気付いた。
「そういや、そこにいるのは誰だ？」
僕の存在は本七冊よりも小さいらしい。
「先日ここに来たんだよ。しばらくここに滞在する予定らしい」
「新入りか？」
「いや、しばらくの間居るだけだ」
釣り人がした僕の紹介はそこで終わる。
僕はこの村の住人ではない。そう改めて言われた気がした。
「ふーん、まぁいいや」
彼は十文字にも満たない感想で僕への興味を失う。
自己紹介もする気がない彼に代わって、釣り人が言う。
「彼はこの図書館の司書だよ。と言っても、ただ本を読んで過ごしているだけだけど」

「図書館？」
「そう呼ばれてるだけ。この村の誰もここまで本を借りに来ることはないし、ここにあるのは僕が拾ってきたものだけだ。本の類はほとんどここに届けている。図書館と言うよりは本の置き場だよ」
言われてみて僕は改めて辺りを見回した。
入ってきてすぐには足場もほとんど見えなかったが、暗闇に目が慣れてきた今なら、すぐ近くの本棚くらい見えるようになっていた。
本棚に並ぶのはジャンルも作者もタイトルもサイズもバラバラの本。逆さまに差し込まれた本は、適当に並べられたという司書のずぼらさを物語っていた。
「読みたい本があれば読んで良いぜ。他に読む奴もいねぇしな」
「人に貸し出すのならもう少し手入れするんだな。ところで彼は？」
「ああ、じいさんならまだ寝てるぜ」
「じゃあ、また後で寄らせてもらう」
そう言って釣り人は別れの挨拶もせずに歩き去っていった。僕は慌てて彼の後を追う。
後ろで司書のあくびをする声が聞こえた。

II－V　親子

図書館――と呼ぶしかない建物――の次に彼が向かったのは、その隣に建つ小さな家だった。
家のほとんどを木で作られたログハウスは、避暑地へ行けば当たり前のように並ぶもののようだ。
釣り人はやはり挨拶も無しに家の裏へと回り込む。家の裏には小さな庭が広がっていた。庭を飾る色とりどりの花は僕には名前も分からないような花ばかりだったけれど、切りそろえられた芝生も、木陰を作る小さな木も、暖かな家庭の一軒家を連想させた。
そんな庭に面したベランダに、この家の主達はいた。
暖かな日差しの元、庭を見渡せる位置に設けられた安楽イス。そこに座りゆらゆらと揺れているのは穏やかな顔をした老女。そしてそれに寄り添うように立っているのは昨日会った少女よりは年上の、少女とは言えない年齢の女性。二人並ぶその姿は親子だ。
「あら、いらっしゃい」
無断で庭に入ってきた僕達を見ても、女性は文句一つ言わず迎えてくれた。
「あら、見かけない子ね。新入りさん？」
最初と同じ言葉から彼女は始める。後で聞いた話によると、彼女の口癖だそうだ。
「いや、しばらく滞在するだけだ。紹介がてら荷物を持ってきた」
「あら、ありがとう。すぐにお茶とお菓子を出すわね。君もゆっくりしていってね」
優しく僕に話しかける彼女に僕は暖かい気持ちになり、お礼を言う。釣り人はベランダに設置されている白く小さなテーブルとイスに腰掛け、僕もその隣に座る。

目の前の老女はゆらりゆらりと気持ちよさそうに揺れている。
「お加減はいかがですか？」
釣り人はそう言ったが、それは義務的なもののようだと感じた。
「変わりないわよ。ごめんなさいね、いつもいつも」
「好きでやっているんだから気にしてません。むしろ物が減って助かります。それにここのお茶は嫌いではありません」
「そう言ってもらえると助かるわ」
そう言っている内にお茶の準備は整った。テーブルの上ギリギリにまで並べられた人数分の紅茶とそれに入れるミルクと砂糖。皿に盛られたクッキーとタルトは香ばしいにおいを放っている。
「さあ、どうぞ」
そう言う彼女に礼を言い、僕はクッキーを一つつまんで口に放り込む。サクッと良い音を立てたクッキーは口の中で砕け、家庭的な味を口いっぱいに広げた。そういえばここに来てから何も食べていなかったなと僕はふと気づいた。しかしここでは食事など必要ないことを思い出し、その考えを終わらせる。僕はこの世界についてのある程度のルールを知っているのだ。
釣り人は何も入れないままかすかに音を立てて、湯気が立つ紅茶を飲んでいる。
「あら、お母さんも食べてよ。せっかくうまくできたんだから」
ほとんど手を付けていない老女に女性はクッキーを勧める。老女はにっこりと笑った。「ごめんなさいね、ついさっきいただいたばかりだから欲しくないのよ」
ついさっきとは僕達が来る前だろう。しかし女性の答えは違っていた。
「あら、今日はまだ一回もお茶を出してないわよ。お母さん忘れたの？」
「そうだったかしら、ごめんなさいね」
「もう、だから私がついてないとダメなんだから」
それはどこにあっても不思議ではない親子の光景だろう。しかし

釣り人は彼女には聞こえないよう小さなため息を吐き、紅茶を飲み終えると帰り支度を始めていた。
「これが今日の分です。それでは僕達はこれで」
「あら、ご苦労様。またね」
さっさと庭を後にする釣り人に代わり、僕は別れの挨拶をして釣り人の後を追った。
ソリの前で僕を待っていた釣り人は、僕の顔を見て、今度ははっきりとわかるようにため息を吐いた。
「気づいてないようだから言うけど、この世界に血縁関係なんてない」
ではあの二人は親子ではないのか。さらに釣り人は言った。
「ここで聞いたこと、見たことすべてが本当のこととは限らない。どんなにおいしいお茶もお菓子も子供のママゴト道具に過ぎないんだ」
「でもあの人達は・・・」
「あの人はずっとあそこで親子ごっこを続けているんだよ。そしてもう一人はそれに付き合っているに過ぎない」
それはどっちがどっちのことだろうか。
釣り人は自分で確かめてみるんだと言い、再びソリを引く。
振り返った僕は改めて家を見つめる。最初は素敵だと思ったログハウス。しかし今は別の物に見えてしまった。それが何に見えたかは今の僕にもわからない。

II－VI　芸術家

この世界には実用的なものも、娯楽的なものもほとんど存在しない。しかし両方存在する。どんなに娯楽的な価値があっても、それはどんなものよりも実用的なものなのだ。それは趣味と仕事を兼ねているとかそういう意味ではない。文字通り、存在するために必要なことなのだ。

そしてこの世界の人々はそういったものを一つは持っているという。他人から見れば意味のないものでも。そしてその人達にとっては自分のもの以外は何も意味を持たない。それはものであれ、人であってもだ。

僕が次に会った住人もそんな人間の一人だった。

その家は外見は普通の家なのに、中に入るとむわっとした曇った空気が支配していた。カーテンによって遮られた窓はほとんど開けられたことはないらしく、汚れて元の色もわからなくなったカーテンが光を拒否している。もはや飾りと化していた。

僕はこの家の空気が気持ち悪くて、扉が開かれると共に流れ込んできた空気に押し返され、吐きそうになった。

釣り人はそんな僕を気にも留めず、他の家と同様、ノックもなしにずかずかと上がり込んでいった。僕は口を手で覆い、吐き気を押さえながら彼に続いた。

家の中に充満していたのは濁った空気だけではない。においもだ。この家は何日空気を入れ換えていないのだろうと思うほどそのにおいは濃くなっていた。それは決して良いにおいとは言えず、どちらかというと気分を害するものだ。そしてこのにおいは僕も知っているにおいだと思うのだが、どうやらいろいろなにおいは混ざっているらしく、一体何のにおいなのかわからなかった。

僕は今すぐにでもここから出たかったのだが、それではついてきた意味がない。

釣り人は暗くてわかりにくいが、おそらくいつも通りの表情で奥へと進んでいった。

それほど広くない家にはいろいろな物が落ちており、時々僕や釣り人の足に当たって転がる。釣り人はそれも気にせず進んだ。

そしてその家の主は家の一番奥と思われる場所にいた。外観から考えても、その家はどうやら一つの部屋しかないようだ。

その部屋の一番奥には誰かの背中が見えた。目の前にあるのはおそらく大きな絵だ。そこに何かを描いている。しかし暗くて何を描いているのかわからなかった。

そこで僕は何かの視線を感じた。いや、この家に入ってからずっと感じていたものだ。最初はその正体がわからなかったが、今はそれが視線だとわかった。しかしこの家には僕たち以外の生き物の気配がない。

僕はその視線が気味悪くて仕方がなかったが、釣り人はやはりその視線さえも気にせず持ってきた荷物を床に置いた。

そして部屋の主に声をかけることもなく出ていった。

「あれのことは気にしなくていい」
釣り人がそう言ったのは帰路の途中だった。すでにソリの荷物を全て下ろし終えたウォルガは、行きよりも軽々と足を運んでいる。
「あれってさっきの人のこと？　気にしなくていいってどういうこと？」
僕の質問に釣り人は答える。これは彼が答えても良い質問だったらしい。
「あれは一応芸術家という奴だ。特に作るものは決まってない。絵でも彫刻でも、何かの姿を現す物なら何でもやっている」
「姿？」
「この世界の住人は多かれ少なかれ、存在するために何かをしている。あの芸術家が何かを描いたり作ったりするのもそのためだ。だけどただそれをしていればいいわけじゃない。自分の存在を忘れてはいけない。あれはこの世界の住人がいつか迎える末路に足を突っ込んでいる」
「末路？」
僕の質問に答える気があるのかないのかわからない釣り人の言葉。しかしそれはこの世界で存在するために忘れてはいけないことだ。
「君もわかっているだろうが、ここは失われたものが来る世界。ここで自己を証明するのは自我のみ。それを保つために何かをする。だけどそれに執着しすぎて自己を忘れてしまう者もいる」
「その人間はどうなるの？」
それだけは僕も知らない。そして知りたかったことだ。
釣り人は僕の顔を正面からはっきりと向き合った。
「それはここに居続ければいずれわかる。それが誰なのかはわからないけど」

それはあるいは僕か君かもしれない――――――。

ＩＩ－ＶＩ　芸術家（後書き）

二章終了です。
謎が残ってますがそれは三章以降にて。

III－I　研究者I

僕がそのことを思い出したのは来た道を戻る途中、図書館と呼ばれる建物が見えてきた頃だ。
「そういえば、後で図書館に寄るんじゃなかったの？」
僕が忘れていたように、彼も忘れていたのではないかと思い、言葉にして口からはき出した。釣り人は何でもないように言った。
「ついでに一度顔を見てもいいかと思ったんだ。どちらにせよ、彼に渡す荷物は多くて一度は取りに戻らなければならないから」
既に荷台の荷はすべて下ろされている。
「行っても行かなくてもどちらでもいいんだ。思ったより早く他の荷物を届けることができたから、一度戻っても変わらないと思った。君は別に来なくてもいいよ。彼に会っても君のためになることがあるとも思えないしね」
「どういう人なの？」
「知りたければ一緒に来たらいい。君の好きにしたらいいよ」
そう言って彼は図書館の戸を開くことなく通り過ぎた。

結局僕は彼についていくことにした。
倉庫から大量の荷物を再び荷台に積んだ釣り人は、始めと同じ道を再び歩き、また図書館と呼ばれる建物の前で止まった。
やはり彼はノックもせず、荷物の一部を抱えて中へ入っていった。僕は何も言わずにその後を追う。
建物の中はやはり暗くて、慣れるまで床に散らばった本に躓いた

り蹴飛ばしてしまったりする。釣り人はそんな僕の存在も忘れているかのように振り向きもせず奥へと進んでいく。そしてやはり彼の元に辿り着く。
やはり本のベッドの上で眠っていた彼を見下ろすと、釣り人は彼の寝床を蹴った。土台を失った本の山はあっという間に元の半分程度の大きさまで崩れてしまい、その上で寝ていた人物は強制的に起こされることとなった。
「だ〜か〜ら、おまえはもう少しまともな起こし方ができないのか」
崩れた本に埋もれた彼はもはや寝床にならない本の山からはい上がって、不機嫌そうな声で言った。しかし釣り人は何でもないように言った。
「毎回起こすことになるこちらの身にもなったほしい。ところで彼はもう起きたか？」
「ああ、おまえが来るのを待ってる」
そう言うと司書の彼は建物のさらに奥へと向かう。僕と釣り人もそれに従う。

建物の一番奥にあるのは一つの扉。司書がノックすると中から返事があり、僕たちは中へと誘われた。
部屋の主は狭い――というより物であふれかえっている――部屋で、色あせた革張りの椅子に座り僕たちを迎えた。白髪交じりの無精ひげの生えた中年なのか老人なのかもわからない男性だった。よれよれのワイシャツの上から白衣を着ているようだが、シミと穴だらけの白衣は、もはや元の色などわからなくなり、かろうじて白衣だとわかる程度だ。
「おお、よく来た。ささっ、座れ座れ」
そう言われても、この部屋の何処に座る場所があるというのだろうか。部屋の主が座っている椅子とそれの前に置かれた明らかにセットではない机以外は、部屋のほとんどを本棚や怪しげな物が並べ

られている棚が占めており、残った部分にも無造作に積まれた本や何に使うかわからない小物が占領している。歩くことさえかなり困難な場所だ。棚に並ぶのは専門用語が入ったタイトルの僕には何のジャンルなのかすらわからないような本や、紫や青など毒々しい色の液体が入った瓶やフラスコ。他にも見たことのない動物の骨や鉱物など、学校の理科室よりも危ない、魔女の研究室のような場所だった。とてもではないがこれ以上先には進みたくないと、部屋の入り口から入ろうとしない僕だった。

「座ることを勧めるなら椅子ぐらい用意するんだな。それとあなたと話す気もない」

ずいぶん冷たい言いぐさの釣り人に対し、部屋の主は気にせず笑った。

「ははは、相変わらずだな。たまには話だっていいじゃないか。いつもおまえは荷物を届けるとすぐに帰ってしまうんだから」

「あなたと話していると日が暮れてしまう」

「時間なんて気にしなくていい。ここに時間なんてほとんど意味を持たない。見かけだけの太陽なんて気にするな。時間の流れなど人それぞれだ」

そして彼はようやく僕の方を見た。

「ところで彼は新入りかい？」

「いや、一時的に滞在しているだけだ」

「何だ、それは残念だ。ここには他にはない至高の幸福があるというのに。しかし人によっては絶望的な永遠の檻だな」

もはや僕にはこの人が何を言いたいのかすらわからない。彼は僕に向かってこう言った。

「名も知らぬ客人よ。ようこそ世界の果て、また世界の終わりとも呼ばれる世界へ。私はこの世界の住人。名も捨てた狂人。ここでは研究者と呼ばれている」

III－II　研究者II

「それすら呼び方の一部に過ぎない。ここは生きとし生けるものすべてが生まれたときより知っている場所で、そしてその欠片さえ知らない場所。終わりと言ったが始まりと呼ぶ者もいる。またある者は忘れられた世界、またある者は世界ですらないと言う。そもそも世界という概念さえここにはない。だから住人達は単純に”ここ”と呼んでいる」

この世界で会ってきた誰よりも饒舌な彼は、僕がどう答えればいいかも分からず悩んでいる内に次の言葉を紡ぎ出す。

「では私たちが言う”あそこ”や”向こう”はどこを指すのかと言うと様々だ。小島から対岸を見るようなものだ。右を見れば陸があり、左を見れば違う陸がある。しかし実は同じ陸かもしれない。右の次に左を向いたつもりでまた同じ方向を見ているのかもしれない。もしかしたら上を向いているのかもしれない。そしてそこには空ではなく海が広がっているかもしれない。砂漠かもしれない。人の目なんて怪しいものだ。今見えているものが本物なのかもわからない。もし脳に直接『〇〇が見える』という命令が送られれば、本当にそれがあるかのように見える。

さしずめ脳は生き物のだまし絵だ。いや、その脳によって伝えられる”世界”もだまし絵と言えるだろう。人によって見えるものが違う。しかしどれが正解でどれが間違いかなんて誰にもわからない。本当の正解を知る者がいないからだ。しかし人間というものは自分が正しくないと気に入らないらしい。何事にも自分を証明の中心にしたがる。他人の事なんてどうでもいい、自分が良ければそれでいいなんて言っている人間は自分が正解でないと落ち着かないんだよ。まるで子供だ。しかしそれが人間の本質でもある。そもそも自分と

は何か、自分とは本当に存在しているのか。他人の言葉など信用できない。もしかしたら自分の都合の良い夢なのかもしれない。いや、もしかしたら自分自身が誰かの見ている夢なのかもしれない。本に描かれた空想なのかもしれない。

では、今ここにいる我々は何であるのだろうか。そして我々がいるこの世界とは、そこにいる意味とは？　誰も答えられはしない。この世に全能の神が居ない限り、この問いに答えられる者はいない」

話が終わることには、僕は一体最初に何の話をしていたかすらわからなくなってきた。幸い僕が完全な混乱状態に入る前に彼は話を終えた。そして話し続けて乾いた喉を潤すために机に置かれたマグカップに手を伸ばした。清潔感からほど遠いこの部屋の一部と化したマグカップは、やはり黒っぽい汚れが抽象画のように描かれている。普通なら手も出したくないだろうカップを、彼はまったく気にせずその中身を一気に飲み干した。

気がつけば釣り人は壁に背を預け部屋の主を見てすらいない。司書の彼は退屈そうにあくびをしていた。どうやらまともに話を聞いていたのは僕だけらしい。そして僕もまともに彼の話を聞くのはこれきりにしたいと思った。彼の話を聞いていると僕か彼のどちらかの頭がおかしいのではと思えてきてしまう。

話を聞かない客人は話が終わったのを確認するとさっさと帰る意志を示す。

「いつも通り荷物は玄関前に置いておきますから勝手に持って行ってください」

「もう帰るのかね？　久しぶりに顔を見せたのに」

「顔を見せたのは彼にあなたを紹介するためだけです。それがなけらばわざわざ顔だって見せはしない」

どうやら本当に彼はここに来るのが嫌なようだ。そしてその気持ちが僕にも少しはわかる気がした。

僕たちが姿を見せてからというもの、研究者は話をしているときでさえ僕たちをじろじろとなめるように見続ける。まるで顕微鏡の微生物を観察するかのようにだ。そして観察というたとえはたとえでなく事実だろう。僕たちの細かな動きにすら彼は目を向ける。これではくしゃみ一つできやしない。もっとも釣り人は慣れた様子で、しかし好ましくは思ってないらしく、最初から最後までここにいたくないという意志を隠しもしなかった。

「それでは僕たちはこれで」

それだけ言うと釣り人はきびすを返し、一度も振り返ることなくその場を後にした。僕は慌ててその後を追う。

一度だけ振り返ったとき、開け放たれたままの扉の向こうから研究者がおもしろそうに僕たちを見送ったように見えたのは気のせいではないだろう。

ＩＩＩ－ＩＩ　研究者ＩＩ（後書き）

ほとんど一方的な会話だけで終わってしまいました。今回の研究者の話はこの物語のキーポイントです。

それにしても書くのにとても疲れる話でした。

III―III　少女II

家に帰る頃には太陽が隠れ始め、空が真っ赤なベールを被っていた。

釣り人は何も言わないままウォルガを小屋に入れて、さっさと自分の家へと入っていった。僕は何もすることがないので再び森の入口へ行ってみた。

森は朝来たときと変わらず霧に覆われていた。今朝見たときは朝だからだと思っていたが、既に日が暮れる今でも霧はそこにあり続けている。まるでそこが自分の定位置だと言わんばかりにだ。僕がここに来たとき、霧はなかった。あの時が以上だったのか、それとも今が異常なのか。おそらく後者だろうと僕は思った。特に理由があるわけではない。ただの直感だ。

あの時この世界は僕を迎え入れた。普段は霧によって阻まれる森は、来訪者の為に道を開いたのだ。

そう、僕は知っている。

世界は僕を迎え入れたのだと。

まるで教科書を開くかのように知識があふれてくる。この世界のありよう。それは誰もが知っていることだ。ただ忘れてしまっているだけで、一歩この世界に入れば記憶は蘇る。そういうふうになっているのだ。

ただ僕はそのすべてを思い出してはいない。まるで白線の外から足を出さないようにして中をのぞき込んでいるような。僕は内側から押し出されている。外側から引っ張られるのではなく。

この森は境界線。村の住人は入ろうとしない。この森の向こうは別世界だからだ。

しかしただ一人森を自由に行き来する人間がいる。彼はなぜ平気

なのだろうか。この世界の者なら本能的に入ろうとしないはずなのに。
彼は違うと僕に教えてくれた少女がいた。この世界にあってこの世界の者とは一線を引く彼は何者なのだろうか。

「こんにちは」
彼女はまた同じ挨拶をする。
「こんにちは」
僕もやはり同じ返事をする。
そしてやはり同じように会話が始まる。
森の入口にある石に僕たちは二人並んで腰掛ける。座り心地は良くないが、この際文句は言えない。
「今日はどこへ行っていたの？」
少女は問う。
「村をまわってたんだ」
僕は答える。
「そう。それで感想は？」
「変わった人たちが多いなと思ったよ」
「でもあなたの言う『変わってる』が私にはわからないわ。だって彼らは私からすればどこもおかしくないもの。変わっているというのは私のような人を言うのよ」
そうだね、と僕は相づちを打つ。他人と関わらないのがこの世界の人々の生き方だ。関わっているように見えて、実は自分の世界だけを見ている。他人など世界の付属品に過ぎないのだ。
そう、僕は知っている。僕や彼女の方が異端なのだと。もう僕はそれを思い出している。
「あなたと一緒にいる彼の方が異端だわ」
少女は僕の心の声を読んだかのように言う。

「彼は他人と関わることで世界に存在する。自分だけの世界が存在しないの。どうして彼だけがそうなのかはわからないけど」
僕は何も答えられない。意味がわからないのではない。思い出せないのだ。僕はおそらく唯一彼以外で彼のことを知っている人間だ。しかし今はまだ思い出せない。彼の世界がどこにあるのかを。
少女はすくりと立ち上がった。
やはりまたねと言って彼女は村の方へ帰って行った。
僕は返事をしなかった。
きっと僕は彼女の世界がどういうものなのかに気付いている。彼女の世界も他人がいて成り立つものなのだと。きっと彼女は気付いていないのだろう。自分の世界のあり方に。

その日、倉庫に戻った僕の元にやってきた釣り人は、僕の話を聞いてこう言った。
彼女の世界は月なのだと。
僕はそれを聞いて納得した。

ＩＩＩ－ＩＶ　神話

昔々、まだ人と神が共存していた頃、一人の少年がいました。
少年は気性が荒く、乱暴で、いつも他人に迷惑ばかり掛けていました。
ある日、少年は一人の少女に出会いました。
少女は少年に冷たくされても、決してそばを離れようとはしませんでした。
少女は少年が本当は優しく、
しかしそれを表に出せないということを知っていたからです。
ある日、少女は重い病気にかかってしまいました。
その病気を治す薬は遠い街にあり、どんなに急いでも少女の身体が保ちません。
皆が諦める中、少年は街へ薬を取りに行きました。
傷だらけになり、泥だらけになり、それでも少年は走り続けました。
しかし薬を買って村へ戻る途中、どうしても足が動かなくなり、
少年は歩けなくなりました。
どうしても走りたい。
そう少年が願ったとき、一人の神様が少年の前に降り立ちました。
神様は少年に言いました。
「君がどうしても走りたいというのなら、君を速く走れる姿にしてあげましょう。
しかし、君がどんな姿になっても周りの人が君を君だと気付かなければ、
君は一生その姿のまま、人の姿には戻れなくなってしまいます」

少年はそれでもかまわないと答えた。
神様は少年を四本足の獣の姿にしました。
獣の姿と化した少年は風のように走りました。
走り走り、少年は少女の家の前までやってきました。
出てきた人々は突然現れた見たこともない獣に驚きましたが、
獣が持つ薬に気付き、それを少女に与えました。
少女は助かりました。
人々はこの黄緑色の身体を持つ不思議な生き物を、神様の使いだと考えました。
たくさんの人々が獣に感謝の言葉を述べました。
しかし誰一人として、この獣が少年だと気付く者はいませんでした。
しばらくして少女は目を覚まし、獣に会いに行きました。
優しく身体をなで、感謝の気持ちを表す少女でしたが、
やはり獣の正体には気付きませんでした。
病気が治った少女は少年に会いに行きました。
しかしどこを探しても少年の姿はありませんでした。
そこで少女はやっと獣の正体が少年であるのではないかと考え、
獣に会いに行きました。
しかしそこにはすでに獣の姿はなく、二度と姿を現すことはありませんでした。
人の姿に戻れなくなった少年は、その後神様に拾われ、
神様の乗り物として生き続けることとなりました。
神様は少年に言いました。
「いつかあの少女は君に会いに来て、そして名前を呼んでくれるだろう。
その時、君は人に戻れるだろう」
だから少年は待ち続けています。
あの少女が会いに来るのを、名を呼ばれるのをずっとずっと待っているのです。

「そしてその獣はウォルガと呼ばれ、神の乗り物として他の神話にも登場するようになる」　釣り人はぱたりと本を閉じた。
僕はすぐそばで釣り人に甘えてくるウォルガを見て言った。
「少年は今も待ち続けているのかな」
ここにいるウォルガが本当に神話の中のウォルガなのか、それともただの想像が実体化したものなのかは僕にもわからない。だけどそんなことはあまり大きな意味を持たない。ただ僕が知りたいのは、少年と少女の願いは今も続いているのかということだ。
釣り人はウォルガの首を掻いてやりながら言った。
「君がそう思うのならそういう世界も存在する。ここはそういうところだ。でも、きっとそうなのだと僕も思うよ」
少年は言った。
「そして少女も、少年を捜し続けていると思うよ」
ふと見たウォルガの表情が、笑ったように見えたのは気のせいだろうか。
その瞳に映る世界、そして彼が生まれた世界はなんて美しく、そしてゆがんでいるのだろうか。
いつか来るかもしれない、永遠に来ないかもしれない、存在するかすらわからない願いを、僕たちは夢見ているのだ。

III－V　月

彼女の世界は月なのだと釣り人は言った。
僕はそれに納得した。
彼女は常に光を受け輝く月。自らの力では輝くことができない。だから他の光を求める。
釣り人は光に集まる蛾のようだとも言った。蛾が光に集まる理由はわからない。もしかしたらたいした理由はないのかもしれない。少なくとも、人にとっては知る必要のない理由だ。
彼女が光を求めるのにも理由があるのかもしれない。だが他人が知る必要のないものかもしれない。
それともやはりたいした意味もないのかもしれない。
他人という光を受けることでしか輝けない少女。だから彼女は他人に興味を示す。近づく。
しかしこの村の住人達は、他人を求めていない。限られた世界にあるものだけを必要とし、それ以外はあってもなくてもいい存在だ。
自分を自分たらしめる存在があればいい。それだけで生きていられる。
「それでも、月は所詮かりそめの輝きしか持たない。彼女も同じだ。他人が居るから存在できる。だがそれはかりそめでしかない。自分に輝く力がないから他人を求めているだけだ」
釣り人が言った話が耳に残っている。この世界で人々がそれぞれ何かを必要としているのなら、彼女にとってはそれが他人なのだと。そしてそれはこの世界ではもっとも危うく、儚い存在なのだと。いつ消えてしまうかわからない泡のように。いつか彼女の世界は消えてしまうのだろうか。彼女の存在と共に――――。

「人間が自分を自覚するのに必要なのは他人。他人が居るからこそ人は自分を認識できる。『外』じゃよく聞く話だな」
本のベッドに横たわり、本を読みながら彼はそう言った。
「『外』の哲学者の有名な言葉がある。『我思う故に我有り』これはすべての存在を疑うという行動を取っている自分だけは間違いなく存在しているという考えだ。だとすると、人は他人がいなくても存在することになる。存在するだけなら簡単だ。だが自我を確かなものとするなら他人は必要だ。他人に認められること、違いを見せつけられること、人は他人と接触することにより『自分』を認識する。だけど『ここ』は『外』とは違う。ここでは自我がすべてだ。そしてその自我を保つ『何か』が必要だ。そしてそれ以外はどうでもいいのさ。他人も、自分が何者であったのかさえ」
「『自我』を保つためにしているのに、自分を忘れてしまってもいいの？」
暗い図書館の中で僕たちは語り合う。この世界とここに生きる人たちについて。
幸い彼はおしゃべりが嫌いではなく、むしろ人と話すことを楽しむ人間のようだ。
釣り人は知識を無駄に持つ人間はやたらその知識を披露したがるものだと言っていたが。
それは僕にとっては都合の良いことで、この世界のことをもっと知る必要がある。それが僕の目的に繋がる。僕の知識は小学生の算数レベルで、数学には至っていない。それだけでは足りない。
釣り人はあまり話したがる人間ではないし、僕も彼ばかりに迷惑はかけられないのでこうやって他の人間の話を聞いている。
最初に彼の元へ行ったのは正解だったのだろう。少なくとも彼は、自分の世界に酔いしれてはいるが、他人との接触を切ってはいない。

今もこうやっていやがることなく話をしてくれる。
「自分がここにいるという『感覚』があればそれでいいのさ。名前や生年月日は必要ない。個人情報なんてここではそこら辺に落ちてる石ころよりも価値のないものだ。必要なのは『感覚』だ。まだ自分が存在しているという感覚。それがあれば十分なのさ」
それに何の意味があるのだと問うと、司書は笑った。
意味もまた必要ないのだと――――。

III－VI　証明

「じいさんによるとこの世界の存在を証明する手立てもまたないそうだ」
読み終わった本を放り投げ、司書は新たに読む本を探している。
彼の周りは既に床が見えないほど本で埋め尽くされていた。
片付ければいいのにと僕が言うと、面倒くさいの一言で一蹴された。
「そもそも俺達の存在自体証明できるものじゃないんだから、俺達がいるこの世界だって本物だとは限らないわけだ」
「こうして僕達がいるのに？」
「それこそじいさんの言葉を借りるならだまし絵ってやつさ。俺が見ている風景とお前が見ている風景が必ずしも同じだとは限らない」
司書は手に取った本をパラパラとめくる。
「たとえば」
司書は開いたページを僕に見せた。
「お前はこの色を何色だと思う？」
そのページに描かれたのは、抽象的な図柄で描かれた赤い太陽だった。
「赤だと思います」
「そうか、俺は朱色だと思った」
それはそれほどの差ではないと思う。色あせた太陽は朱色にもオレンジにも見える。僕にはそれが赤だと感じられただけだ。
「たいした違いじゃないと思うかもしれないが、それは俺とお前の感覚が近かったからの話だ。人によってはこれが青に見えるかもしれないし黒に見えるかもしれない」
「そんなことあるの？」

「あるさ。俺達が赤だと認識している色が、そいつの中では青として認識されているかもしれない」
「それは結局同じ色が見えてるってことじゃないの？」
「いや、そいつがそれを青だと信じればそれは青なのさ」
「？」
「たとえば、神様ってやつを信じる奴と信じない奴がいる。信じない奴からすれば信じる奴は頭のおかしい奴だ。でも信じる奴にとっては神が存在することが真実だ。確かに神の存在を証明する術はない。しかしいないとは言い切れない」
　僕は二度目の疑問詞を口にする。
「悪魔の証明っていうやつだ。哲学分野の話なんだがな。神や悪魔の存在を証明することはできない。しかしそれが存在しないことを証明することもまたできないって話だ」
「いないものをどうやって証明するの？」
「さあな。しかし証明されたことしか真実にならないのなら、『神は存在しない』ということも証明されていないんだから真実とは言い切れない」
　科学の力に頼ってきた人類は、伝説や神話といったものを信じられなくなっていった。しかしそういった存在がいないこと、神話が偽りであると誰も証明できていない。
　僕達人間は、目に見えるものしか信じなくなっていった。
「俺達の存在も神や悪魔とそう変わりはないのさ。俺達が人間であるのは俺達自身が人間だと信じているからだ。信じなければ何も見えない」
「信じなければ僕達は存在できない」
「そのとおり。実態と精神の区別はかなり曖昧なものだ。こういう話は知っているか？
ある男が夢を見た。蝶になる夢だ。蝶になってひらひらと飛び回った。目が覚めたとき男は考えた。自分は蝶になる夢を見ていたのだろうか。それともあの蝶が現実で、今の自分は蝶が見ている夢なの

ではないだろうか」
夢と現実の曖昧さ。人がそれを現実と信じればそれは現実となるのだろうか。それともどうやっても現実は変えることができないものなのだろうか。
この世界では常識が通用しない。現実と仮想の区別がつかない。それこそがこの世界の常識。
僕は今、どこに立っているのだろうか。
「俺達は胡蝶。そしてこの世界は胡蝶の夢。夢の終わりは世界の終わり」

III－VII　世界

帰れば山積みとなったガラクタが僕を迎えてくれる。
いくら釣り人が配達しても、それ以上に増えていく荷物は消えることはない。
僕は固いベッドに横たわり、ここ数日のことを頭の中で整理してみる。
最初に出会った住人は釣り人。森や泉から拾ってきた物を村の住人たちに配る。そして次に出会ったのは少女。他人に自分の存在意義を見いだし、他人によってその存在を保っている。
そして個性的な、そしてどこか歪んだ住人たち。司書、老女とその娘、芸術家、そして研究者。それ以上いるのかはわからない。ただ、彼らはそれぞれ何かを自分の存在を維持するためのよりしろとしている。
彼らは一つの存在によって維持され、それを失うことで存在意義を失う。
僕にはそれがない。『ここ』の住人ではないからだ。
強いて言うなら、一つの目的が僕をこの世界へ導いた。夢だと言われればそれで納得してしまいそうなほど危うく、不確かな世界へ。
村の住人たちを見ていて一つ不思議に思ったことがある。
釣り人のことだ。
彼は他の住人たちとは何かが違う。何かに執着することもなく、他人の存在意地に力を貸している。おそらく彼が日課として行っている物拾いも何の意味も持たないのだろう。
根拠はない。ただ、そんな気がした。
ふと部屋を見渡す。二階の半分は僕の生活空間となっており、残りの半分は釣り人が拾ってきたガラクタで埋め尽くされている。

僕は起き上がり、ガラクタをあさってみる。壊さないようにとは言われていたが、触る分には問題ないだろう。
統一性のない、ただ無造作に置かれていると言ってもいいその中から、僕は一つの砂時計を見つけ出す。
周囲の囲いは木製で、丸いガラス玉を二つくっつけたようなシンプルなデザインのものだ。おみやげ屋に行けば売ってそうな、安物臭いそれに、僕は何故か惹かれた。
砂時計の上部のガラス玉には罅が入っていた。おそらくひっくり返せば中の砂が漏れ出てしまうだろう。
だからこの砂時計は永遠にひっくり返されることはない。時計の時間は止まったまま。その役目を果たすことはない。
そして砂は永遠にもう片側へ向かうことはない。砂のあるガラス玉とないガラス玉。この二つの中の世界は変わることもなく、完結されたものとなっている。
この世界が動き出すにはひっくり返さなければならない。しかしそうすれば砂は漏れ出し、砂のないガラス玉は真の終焉を迎える。もはやこの二つの世界は終焉という形でしか動くことはできないのだ。
完結しか用意されていない未完結の世界。そしてある意味完結された世界。動くことがないのなら、それはもう終わっているのと同意ではないだろうか。
僕は砂時計を手にしたままベッドに戻る。この砂時計に惹かれたのは、きっとこの完結された世界に既視感を得たからだろう。
そう、この不安定な完結は僕の世界に似ている。僕は自分の内にある世界の終わり方を知っている。しかしそれを終わらせることができない。終焉を迎えた世界は二度と動くことはない。それを恐れているのだ。
そしてこの世界にもはや終焉しか用意されていないことにも気付いている。僕がどう動かそうが、世界は予定された終わりを迎えるだろう。

僕がこの世界に来た時、それは既に決まっていた。
僕は動かしたいのか、それとも動きたくないのか。きっと答えは出ている。ただ僕が気付こうとしていないだけで、いつか世界は僕を置き去りにしていくだろう。
ごろりと転がり、窓の外を眺める。日が沈むのが見えた。
変わっているようで、何も変わりなく廻っているこの世界。
僕は、ここに僕の終わりを探しに来た。

IV－I　役割

その家に近づいたのは気まぐれだったとしか言いようがない。最初からその家に行くつもりはなかったし、近づいていることにすら気付いていなかったのだから。

そして今僕がこの家の庭にいるのは偶然としか言いようがない。たまたま家の住人が僕に気付き、お茶に誘ったからだ。

そして気まぐれと偶然の結果、僕はここにいる。

数日前と同じように、庭に面したイスに座っている。あの時と違い、僕の隣に釣り人はいないけど。

目の前の机の上には優しい香りを放つハーブティー、色形様々なクッキーやマフィンが並べられている。

そして笑顔を絶やさず庭に咲く草花を説明して入れる女性。僕は彼女に招かれてこの場にいる。どうやら彼女は客をもてなすことが好きなようだ。そして人の世話をすることに生き甲斐を感じているのだと言う。

「お母さんは足が弱いから私が家事をすべてこなしてるの。このお菓子も私が毎日作ってるのよ」

それはすごいですねと素直に言うと、彼女は満足そうな顔をした。

「お母さんは一人じゃ何もできないから私がいないと」

それは美しい親子愛？　最初はそう思えていたものが少しずつ変わり始めていた。

「庭の手入れも私がやってるの。お母さんは草花が好きだから」

「私そんなこと言ったことあるかしら」

「あら、何言ってるの。自分で言ったことも忘れちゃったの？　本当に私がいないとダメなんだから」

二つのピースが合わさらない。まるで一方が無理矢理はめ込もうとしているみたいで。彼女は何を求めている？　彼女がこの世界にいる理由は？
ふいに釣り人が言ったことを思い出した。

「あの人はずっとあそこで親子ごっこを続けているんだよ。そしてもう一人はそれに付き合っているに過ぎない」

ああ、そういう意味なのか。ようやくわかった気がする。
お茶がなくなったので入れ直してくると言って女性は家の中に戻っていった。その場には僕と老女だけが残された。
「ごめんなさいね、付き合わせちゃって」
老女は穏やかな顔を少し困らせた顔に変えて僕に言った。
「ここに来るのはあの人ぐらいだから。お茶の相手もなかなか見つからないのよ」
「かまいませんよ。このお茶とお菓子はおいしいですし」
僕がそう言うとありがとうと老女は礼を言った。
「気付いていらっしゃるんでしょ？　あの子の存在意義に」
老女は僕の顔を正面から見つめた。
「でもそれを本人に言ってはダメよ。気付かなければ保たれる世界もあるのだから」
「あなたは彼と同じなのですか？」
釣ってきたものを配る彼と同じように、他人の存在意地に手を貸しているのか。
すると老女はゆっくりと首を横に振った。
「私はあの人のようにはできないわ。そんなことができるのはあの人だけよ。私がここにいるのはそれが私の存在意義だから」
誰にも愛でられることのない花が風に揺れる。その花びらをさら

ってしまおうとしているかのように。
「私は確かにあの子のごっこ遊びに付き合ってあげているだけよ。でも何も言わないことが私の役目なの。何に気付いても、何もしてはならない。何かを知っていても、何も言ってはならない。そうしなければ私の世界が崩れてしまうから」
「・・・あなたの存在意義を教えてもらっても良いですか？」
僕が訪ねると、老女はまたゆっくりと首を横に振った。
「言ってはならないのが私に課せられたルールなの。でもこれだけは教えてあげられるわ。私の存在意義はこの世界の根源に近いものなの。だから他の人より多くのことを知っている。でも、それを言う資格はないの」
「・・・彼ならそれを言えるんですか？」
「あの人は何も教えてはくれないわ。貴方自身が辿り着かなければならないことだから」
老女はふわりと笑う。
「いつか、貴方がそれに辿り着いたのなら答え合わせぐらいなら付き合ってあげられるわ。またいらっしゃい」
「ありがとうございます」
それが終わりの合図だった。僕は席を立ち、彼女にお辞儀をしてその場を後にしようとした。その時、彼女は僕の背に言葉を投げかけた。
「自分の力で辿り着いたのならそれを語ってはならないというルールはないわ。私以外にもそれに近づいている人はいるはずよ」
知りたければ探してみなさい。
それが彼女のヒントだった。
僕は新たなヒントを手にして今度こそその場を後にした。
庭の花が風に吹き飛ばされ空に舞う。二度と帰らぬ旅へ、その行き着く先は誰も知らない。

IV－II　順番

僕は世界の根源を知りたいのだろうか。
いや、知りたいのは目的の為。それが僕の目的に繋がると考えたからだ。それは直感としか言いようのない根拠のないもの。しかしそれが正解かそれに近いものだと確信している。
釣り人は僕に目的を果たすのは自分の力でしなければならないというようなことを言っていた。あの老女も僕自身が辿り着かなければならないと言っていた。ならこの二つはきっと交わっている。世界の根源と僕の目的。この二つは密接な関係にある。世界の根源を知ることが僕の目的を果たすことに繋がっているのだ。
老女の助言に従い僕はそれに気付いている人間の話を聞くことにする。自分の力でできることはほとんどないに等しい。なにせこの世界には十人に満たない人々と深い森しか存在しないのだ。
あの森に行くことも一つの手だろう。しかし何も知らずに行くのは危険だと僕の勘が言っている。行くなら情報を集めてからでも遅くはないだろう。
さて、話を聞くにしても、僕の知りたい情報を持っていそうな人は誰だろうか。
釣り人は訊いても間違いなく教えてはくれない。僕の目的に手は貸さないと断言しているのだから。
他には？　あの少女はこの世界で生きていく上での成り立ちを知っている。しかしそれはおそらく他の人達も知っているのだろう。釣り人が異端であることに気付いている。しかしそれがなぜなのかは知らない。よって彼女に訊いてもあまり期待はできないだろう。
他には？　司書は知っていても興味がなさそうだ。あの膨大な本

の中に僕が知りたい情報があるとは思えない。ならば誰に？
しばし考え込み、僕は一つの結論に辿り着く。

「それで出た答えが私か」
薄汚い部屋で僕を迎えた研究者は以前来た時と何も変わってはいない。相変わらず部屋は足の踏み場もないほど散らかっているし、彼の服も相変わらず汚れている。ただ元の色がわからないほど汚れた白衣だけが、彼が研究に携わる人間であることを思い出させてくれる。
突然来訪した僕を、彼は喜んで迎えてくれた。普段よほど話し相手に恵まれていないのではないだろうか。もっとも僕自身、彼の話し相手になりたいとは思わないが。
ここに来たときも、司書の彼はかなり複雑そうな、変なものを見るような目で僕を案内した。おそらく彼と話がしたいなんてよほどの暇人かきちがいしかいないのだろう。
「あの人とそれなりにつきあえるの俺くらいだよ。まあそれも利害の一致でしかないけどな」
そんなことを言っていた。
そして僕は今研究者と向かい合っている。座ることを勧めてくれたが丁重にお断りした。そもそも座る場所なんてないのだが。
「まあ君の答えは間違ってはいない。確かに私は君が知りたいことのほとんどを説明できるし、それを言ってはならないというルールにも縛られていない」
ならばと思ったが、
「しかし君は順番を間違えている。私の所に来るのが早すぎる。おそらく私の所へ来るのは最後がいいだろう」
「順番なんて必要なんですか？」
「若い者はせっかちだね。順番を間違えれば同じ情報を与えられて

も正しく受け取ることができない。君の考えは間違ってはいないが、時期を誤っている。そんなに焦らなくても答えは君の元にやってくる」
「それはいつですか？」
「そう遠くはない。私が言えるのはそれだけだ。君が望もうと望むまいと答えは君の元へやってくる。そうすれば自ずと正しい順番がわかるようになる」
「僕にはそれほど長く時間はないんですが」
「そんなこと構ってくれはしないさ。それが君の持つ時間のギリギリであったとしても、時期は変えることができない。しばらく流れに身を任せたらいい。君の進むべき道は抗うことではない。身を任せることだ」
「それで僕の目的は果たせると？」
「私は君の目的が何なのか知らされていない。しかしだいたいの検討はつく。しかしそれが合っていようがいまいが、やり方は変わらない。君にもいつか選択の時が訪れる。抗いたければその時にするがいい。しかし今は違う」
「そんな適当なことでいいんですか？」
「世の中はなるようになっている。君が適当と感じても、それが流れだ。君は魔王や運命に立ち向かう勇者や英雄ではない。自分で道を切り開く必要はない。最初から用意されているのだから無理に手に入れようとする必要もない。運命に文句がないのなら従えばいい。ただそれだけだ」
　なんだか釈然としないが、確かに悲劇のヒーローにわざわざなる必要はない。たとえ適当であっても、それが僕の求める道ならそれを黙って受け入れるのが賢い選択だ。今はその時を待てばいい。
「君がそれでも手に入れられない答えがあったとき、その時私の元に来るといい。それまでは何も考えず、じっと待っているといい」

IV－III　消失

先人の意見は聞いておくものだ。
あの年老いた研究者が言ったとおり、僕が何もせずとも運命は僕を迎え入れた。
彼の元を訪ねて二日ほど経った日、珍しく釣り人が慌ただしく家を出て行った。
そのとき僕は彼の家でお茶をいただいていた。特に話をするわけでもなく、ただ近況報告のようなものを気づいたらする程度のものだった。
だがその瞬間が来たことに気づいたのは彼だけだった。
僕と向かい合っていた彼は突然ビクリと体を震わせ、すぐに天井を見上げた。僕もそれにつられて視線を上に向けたが、そこには古びた木の板しかなかった。
釣り人はしばらく何も言わずに天井ににらみつけていた。いや、天井ではなく別の何かをにらんでいた。
そして持っていたカップを机に置くと、飲みかけのお茶もそのままに帽子だけをつかみ家を出て行った。
もちろん僕は驚いた。しかし彼は残された僕のことなど気にもとめておらず、村の奥へと走り去っていった。
しばらく僕はどうするべきかと考えたが、すぐに彼の後を追いかけた。
理由は特にない。ただそうするべきだと思った。論理も何もない、勘だけの行動だ。それが愚行となるか賢明となるか今の僕にはわからないが、それでも追いかけるべきだと僕の中の無責任な第六感が叫んだ。

僕が追いついたとき、釣り人はある家の前にいた。それは以前僕も紹介された家だ。

その家の住人のことはほとんど知らない。あれ以来会ったこともない。いや、会ったという表現すら怪しい。一言も言葉を交わさなかった。視線すら合わさなかった。ただ彼の家に入っただけだ。僕は彼の顔すら見ていない。見たのは背中だけ。

釣り人は手に持っていた帽子をかぶり、家の戸を開いた。むわっと、あのいやな空気が漂ってきた。

釣り人はそれにもひるまず家の中に入っていく。僕も口や鼻を手で覆いながらその後に続く。

部屋は相変わらず暗かった。気味の悪い視線が僕たちを迎える。何度も来たいとは決して思わない場所だ。もちろん、僕だって用がなければ来たくなかった。しかし、釣り人にはその用事があるようだ。

部屋は以前来たときと変わらず散らかっているようで、僕や釣り人が歩くたびに何かを蹴飛ばす。あの研究者の部屋とどちらがひどいだろうか。そんなどうでも良いことを考えるのはこの部屋のにおいと視線から少しでも逃れたいためだ。

生き物の気配がないのに視線だけ感じる。それが不気味すぎる。

そして、あのとき三つしかなかった生き物の気配。それが一つ少ない気がする。

釣り人は部屋の奥には行かず、側面にある壁へと向かう。そしてシャッという音と共に、まぶしすぎるくらいの光が部屋に流れ込んだ。

どうやら釣り人がカーテンを開けたらしい。僕は初めて自分がいた部屋の全貌を知る。

部屋のあちらこちらに無造作に転がるのは絵の具やペンキの缶、筆、金槌。のこぎりや彫刻刀までむき出しで転がっている。小さなはしごは大きな物を作るときに使うのだろう。

そして道具と同じくらいたくさんあるのが芸術品。

絵はもちろん、石像木像、掛け軸、陶器、芸術品と呼ばれる人の作る形の数々。それが部屋いっぱいにあふれていた。
どうやら視線の正体はこの絵や石像だったらしい。絵の中の悪魔が、粘土で作られた女が僕たちをにらんでいた。
そして僕の正面、部屋の一番奥には壁いっぱいの巨大な絵があった。
描かれているのは顔だ。そうとしか言いようがない。
十以上の顔がそこにはあった。一本の木に生える顔。喜び、怒り、悲しみ、楽しみ、喜怒哀楽はもちろん、憎しみ、絶望、歓喜、苦痛、存在するすべての顔がそこにあった。まるで悲鳴が、笑い声が、怒声が聞こえてくるようだ。
釣り人はその絵をじっと見つめる。
「なるほど、あなたが最後に行き着いたのはこれか。まあ、悪くない形だ」
この部屋に僕たち二人以外の人間はいない。この部屋の住人はどこにもいない。
「なんとか完成はしているようだ。悔いもないだろう」
「ねえ、ここにいた人はどこへ行ったの？」
かつて、彼が『この世界の住人の末路』だと言った人物は。ただ客人に何も言わず、絵を描き続けていた『芸術家』と呼ばれた彼は。
「もうどこにもいない」
その答えは簡潔だった。それ以外にないのだと言わんばかりに。
ただあのとき釣り人が言っていた言葉。執着しすぎて自我を失った人間の末路。いつ、誰がなるかもわからないとも言った。
それが彼だった。
「ただそれだけだよ」
住人が一人消えた。彼が作った絵や像、すべてを置いて。
ただそれだけ。

IV－IV　湖

住人の一人が消えても村は何も変わらない。今までほとんど他人と接触していなかったのだから当然とも言える。

ただ一人、釣り人だけが後始末に追われていた。消えた住人が使っていた家の整理と片付けを一人で行っていた。

僕はただそれを眺めていた。

手伝おうかと言ってみたが、断られてしまった。これは僕の役目だからだと。

一人で家の中の物を外へ運び出しウォルガにつながれた荷車に積んでいく。次々と運び出されるのは画材道具や彫刻刀。未使用の木片。完成した作品の数々。持ち主を失った物は主と共に消えることなく、この世界に置き去りにされた。

それに対しかぐのたぐいは彼一人で運べないためか、家の中に放置されている。最後には家具以外すべての物が運び出された。床には絵の具一つすら残されていない。

釣り人はウォルガを引き、家主のいなくなった家を後にした。僕もその後を追う。

歩いている間、僕も釣り人も一言も口を開きはしなかった。ウォルガの立てる蹄の音と、荷車が引かれる音だけが耳に入ってくる音のすべてだった。

釣り人は家に戻るわけでも倉庫へ行くわけでもなく、それすら通り過ぎ森の入り口にたどり着いた。

これまで僕はここに来た時以外、この森に入ったことはない。一人で入ることは危険だと感じていたからだ。なら、二人でなら問題はないのだろうか。

森に入ろうとする釣り人の視線の先。何がいるのかと思えば、森の入り口には彼女がいた。釣り人を異端と呼び嫌うあの少女が。いつもと同じこの場所で、僕たちはいつも出会う。

彼女はどうやら釣り人を睨みつけているようだ。正確に言えば彼女の顔はいつもと変わらない笑顔だ。しかし僕にはそれが嫌悪であることを感じていた。彼女はきっとあの顔しか持っていない。他の顔を見せることはないのだろう。

釣り人もしばらくその視線に応えるように彼女を見ていたが、すぐに歩み始め何も言わず彼女の横を通り抜けていった。それを彼女も止めはしなかった。

僕もその後に付いていく。少し彼女のことが気になり視線を向けたが、彼女は去っていく釣り人を視線で追いかけるだけで、僕の方はまったく眼中になかった。こんなにも僕に無関心な態度をとる彼女は初めてかもしれない。

僕たちが通り抜けても彼女はそれを見ているだけだった。背中に視線を感じる。しかしきっとそれは僕にではなく僕の前を歩く彼に向けてのものだろう。振り向かずともわかっている。しかし釣り人が振り返ることは一度もなかった。

僕たちは無言で歩き続ける。そして突然森が開け、大きく美しい湖が姿を現した。

そう、そこは僕たちが初めて出会った場所。僕が最初にたどり着いた場所だ。

湖はあの人変わらず美しい姿を保っている。しかし不思議にもその底は見えない。こんなにも澄んでいるのに。深すぎて見えないのかもしれない。なら、一体どれだけの深さがあるのだろうか。

湖には何も住んでいない。生物の姿は一つも見当たらない。

やはり湖に汚れは見当たらない。なのに初めてここに訪れた時、釣り人はここでガラクタと言える物を大量に釣っていた。

この湖の底には何があるのだろうか。生き物がいないのは見えない底のためではないだろうか。

釣り人は荷物を車から降ろすと、何を思ったのか突然それを湖に捨て始めた。大きい物が落ちたときは大きく、小さい物が落ちたときは小さく、水しぶきが立った。
「何をしているの」
思わずそう訊いてしまう。環境破壊にしか見えない行為。それに何の意味があるのだというのだ。
釣り人は次々と荷物を放り込む手を止め教えてくれる。
「ここを去った人間の持ち物はここに残してはいけない。明日にはあの家も消えてなくなるだろう」
それでは何の痕跡も残らない、だから、
「この森にだけはそれが残る。ここにとどめられるか、底の向こうへと行くか、どちらにせよ彼の生きた痕跡が残される。これが唯一の方法だ」
別に湖に捨てる必要はないらしい。森に放置しておけば勝手にそうなるのだと。
「残されてもそれはもう僕たちの目には映らない。だけど確かに存在している。この森、そしてこの世界の一部となる」
「この世界の一部？」
「そう、君も知っているだろ。この世界は忘れられた世界。忘却の彼方。無へと帰る一歩手前の世界。だからここでの終わりはすべての終わり。彼はようやくその終わりにたどり着いた」
そうなりたくない者ばかりがこの世界にとどまる。必死に自分を保とうとする。だから自分だけの世界を作り出す。
「君も？」
彼もそんな最後のあがきをする人間なのだろうか。そうは見えない。だってあの少女は言っていた。彼は異端なのだと。老女は彼が特別だと言っていた。
釣り人は僕を振り返る。そして、
「答えは君自身が見つけなければならない」
そう言った。もう彼は僕を見ていない。再び作業に没頭する。

「記憶の集まる場所へ。これが僕の最大限の譲渡だ」
それだけ言い残してくれたのは彼の優しさなのかもしれない。

IV－V　姉

僕は普通に生まれ、普通に生きることを普通に定められていた子供だった。僕はどこにでもいそうな両親の間に生まれた、特に特別なものもないどこにでもいる子供だった。どこまでも普通でしかない家、家族、学校、街。そんな中、ただ一つ、普通でないものがあった。僕の姉だ。

どこが普通でないかと言われれば、彼女の存在そのものとしか言えない。ただ彼女は生まれる場所を間違えてしまったのだろう。誰にも彼女を理解することはできないし、同じ価値観を持つこともできずにいた。

同じ世界にいるのに、同じ空気を吸っていない。それは僕自身も同じで、僕も姉のことを理解することができずにいた。

しかしそんな中、僕が普通でなかったただ一つのことは、彼女に惹かれたこと。

普通でないことは共同体の中で生きることを強いる社会に於いて生きにくいだけでしかない。普通でないことは特別ではなく汚いもの、嫌われ者でしかない。だから誰も彼女に近寄らない。姉は常に一人であった。

だけど僕はただ一人、彼女に惹かれた人間だった。惹かれたと言うが、それが好意なのか、それとも好奇心の類だったのか、僕自身にすらわかっていない。でも彼女のそばにいることは決して苦痛ではなかった。

自分にないものを持って生まれ、人とは違うものを見続ける彼女に、憧れか興味か、僕はただ一人彼女のそばにいる人間となっていた。

他人と違うことが良いこととは限らない。それを体現するかのように彼女は独りだった。僕はただそばにいるだけ。彼女の言葉は外国語を話すかのように理解不能なものばかり。

ここは違う世界に、すべての終わりに繋がる場所がある。そのことを教えてくれたのは彼女だった。

そこは終焉の一歩手前。世界のどこにもいなくなった者達が行き着く場所。消えたくないと願えばそこに辿り着く。

子供が言えばただの夢話で済む話も、それを過ぎればただの狂人のイカレ話にしかならない。

彼女は受け入れられることなど望んではいない。信じてもらえなくてもかまわない。誰も彼女の世界を汚すことはできない。人とは違う世界を見る彼女には、僕たちの姿も映っていないのかもしれない。

それでも僕はそばに居続けた。好きだったわけではない。でも、他の誰よりも彼女に惹かれた。彼女が言う話を信じたわけではない。でも、記憶に留めておいた。役に立つとは思えなかったが。

だが、それが役に立つ日は確かに来た。

ある日、彼女は前触れもなく姿を消した。いつの間にか、誰も気付かない内に。同時に彼女の痕跡は次々と消えていった。まるで雪にかき消される足跡のように。

誰も、両親さえも、彼女の消失を気にする者はいなかった。まるで最初からそうなることが決まっていたかのように。そしてそんな彼らから彼女の記憶が消えるのはそう長くはかからなかった。

彼女の生きた形跡が消えていく。いや、最初から残そうとなどしてはいなかった。それぐらい彼女の痕跡は少なかった。

でも、僕は彼女を覚えている。顔も声もほとんど記憶から消えてしまっているのに、その存在だけは消えていない。今も僕の中に残されている。

なら僕は何をするべきなのか。何がしたいのか。その答えが出るのにたいした時間は必要としなかった。

”ここ”に来たのは願いを叶えるため。彼女の言葉が僕をここまで導いた。
だから僕は”ここ”にいる。

眼を覚ませばそこは見慣れた倉庫の中だった。
森に行った後、そのまま家に帰った釣り人同様、僕も倉庫に戻った。倉庫には相変わらずガラクタとしか言えない物が所狭しと積み上げられている。
この世界にあるものはすべて忘れられたものたち。人も、動物も、無機質な物たちも。最後の一線を越える一歩手前で踏みとどまろうとあがいているものたち。
そう、ここは忘却の彼方。忘れられた世界。この世界さえも、消えまいともがくもの。
時間は決して長くない。だから悠長にはできない。チャンスはおそらく一度きり。しかしタイミングを、順序を間違えてはならない。一つでも間違えれば僕の願いを叶える奇跡は永遠に失われる。
そしてその時は近い。
ベッドの脇に置かれた砂時計。これが動くときも近い。
最後を迎えるのは僕とこれ、どちらが先だろうか。

V－I　図書館

「記憶の集まる場所へ」釣り人の残したヒントが僕にとって唯一の手がかり。抽象的な言葉は煙に巻くよりも課題のように見える。それすらわからないのなら進むなと。

僕が向かったのは図書館だった。ここに来るのは四度目になる。そのうち二度は釣り人と共に、残りの二度は僕一人で。

見るからに重く分厚そうな壁に囲まれた建物。ここに住む人間は二人。一人はおしゃべりでだらしない司書。司書とは名ばかりで本を読んでいるだけだ。もう一人は変人としか呼べない研究者。実際に彼が何を研究しているのかまったくわからない。

かつて僕は答えを求めて研究者の元を訪れた。しかしその時はまだ時期ではないと断られた。今もまだ早いのだろう。

今回僕は二人のどちらかに会う為にここへ来たのではない。釣り人のヒントを手がかりに思いついたのがこの図書館だった。

人々の記憶や知識が詰まった本。それを保管し管理する図書館。それは記憶の集まる場所と言えるのではないだろうか。確証はないが他に思いつかず、僕は再びここを訪れていた。

以前来た時は紙の上の情報は僕にとって何の役にも立たないだろうと考えた。しかし僕には他に手がかりがない。

思い扉を開く。外よりも暗い室内には必要以上の灯りは存在しない。それでも司書が起きていれば少しは灯りが灯される。でなければ光のないここは暗闇に飲まれる。客が来ることなどまったく想定していない。図書館としての機能はまったく機能していないのだ。

もっともここの住人は本など読まない人が大半なのだろうが。

灯りが点いているということは司書が起きているのだろう。僕は

わずかな灯りを頼りに進んでいく。いくつかの燭台に灯されたロウソクの光と司書の手元を照らすランタンだけが光源だ。

奥へと進めば予想通り司書が暗い部屋の中で無心に本を読んでいる。読み終わった本は床に放っておき、本の山が彼のベッド。本を大切にしているようには見えない。

釣り人なら容赦なく読書の邪魔をするのだろうけど、僕はそこまで乱暴はしない。そっと彼の傍に立ち声を掛ける。しかし、彼は気付かない。本を読み始めれば周囲の音はまったく聞こえなくなるのだと以前釣り人が話していた。

それはすばらしい集中力だが、社交性はないようだ。再度先ほどよりも大きい声で呼ぶが、やはり気付かない。僕の存在など道ばたの石ころと同じ様なもののようだ。

結局五度目の挑戦で諦めた僕は勝手に一人で始めることにする。しかし、一体何から始めればよいのだろうか。

周囲を見渡せば上から下まで本、本、本、本……。本しかない。

適当に一冊を拾い上げページをめくれば古びた紙の臭いがした。元は白かった紙も、外側だけ黄色くなっている。ほとんど日には当たらないはずなのになぜ黄ばんでしまっているのだろう。それはこの本が釣り人の持ってきた物だからだ。元々これらは新品の状態でここには来ない。だから既に黄ばんでしまっているのだ。その黄色の変色が、本達のあちら側にいたという唯一の証拠。

つづられている文字は様々。現代も使われているような一般的なものから、既に誰も使わなくなった文字まで。絵ばかりで文字がまったくないものもある。

僕に理解できるのは半分もないだろう。司書はこれがすべて理解できるのだろうか。だとしたらすごい能力だ。本人はまったくすごい人間には見えないが。

多くの人々の記憶や知識の詰まった本。これを書いた人たちは何を伝えたかったのだろうか。無秩序な文字の羅列にしか見えないこの本にだって、意味はあるのだ。

気配がしたのでふと振り向くと、司書がようやく読書を終えて起き上がった所だった。司書はすぐ僕に気付いたが驚く様子はない。勝手に他人の家に上がり込んだ侵入者を罰するような常識はここにはないのだ。

「何してるんだ？」

「ちょっと本を読みに」

「ふ～ん」

興味なさそうに言う彼の視点が僕の持つ本に止まった。

「その本」

子供の描いた魔法陣のような絵が表紙になっている本。見たこともない文字が無秩序に書き並べられている。

「この本が何？」

何か特殊な物だったのだろうか。しかし僕の期待は次の瞬間には霧散した。

「それ、昔ここにいたガキが適当に描いた落書き帳だぜ？」

そこに描かれた物、それをどう見るかは見る人次第。僕が行儀悪く本を投げ捨てたのはそのすぐ後。

?―II　司書II

司書とは名ばかりの彼に仕事はない。彼にとって本を読むことは息をすることと同じ。それにしては扱いが乱暴だが。

「本は作者の言葉なんだよ」

知識と空想に酔いしれた狂人の娯楽でしかないと。

「本を書く奴なんて自分の考えてることや知能を自慢したいだけなのさ。俺はこんなにすごいことを知っている。私はこんなにすごいことを考えてるってな」

「それが悪いことなの？」

「悪くはないさ。だけど俺からすれば、自分の内をさらけ出すことに躊躇もしない奴なんて狂人でしかないってことさ」

本には様々なジャンルがある。フィクション・ノンフィクション。ファンタジー、ミステリー。哲学、歴史。小説、評論、実用書。同じジャンルで同じことを書いても書く人間が違うだけでまったく違った本になる。著者の個性がそこに表れる。

模倣（パクリ）は受け入れられない。だが尊敬（オマージュ）は有り。オリジナリティのない作品は受け入れられないが、他人に共感されないオリジナルは敬遠される。

それでも作者は自分の個性を、思考を文章にする。それはまるで自分の心を覗いてくれと言わんばかりに。

「現実（リアル）に生きられない奴は空想（ファンタジー）に逃げるしかない。それでもそいつらは自分のことをまともだと信じてる。うまくやっていけないのは周りの奴らが自分を理解しないからだ、自分より劣っているからだってな」

理解されない者は思う。自分が悪いのではない、劣っているのではない。自分が優れすぎている為に愚鈍な周囲は理解できないのだ

と。なぜそんな奴らのために自分が理解できるようにレベルを下げてやらなければならないのだ、と。
「本当は自分が規格外なだけなのさ。時代にうまく順応できない奴は頭のおかしい奴としか認識されない。本当の天才は理解されにくいが、本当のイカレタ奴は理解されない。それでも自分は天才なんだと信じたいんだろ。だから主張する」
本を書くことは主張だと、司書は言う。
「自分の意見を持つことは大事だ。他人の言うことばかり気にする奴はのらりくらりとクラゲみたいに漂ってるだけだ。だが主張ばかりで相手のことを思いやらない奴を誰が好きになる？　誰が尊敬するんだ？」
本は一方的に語れる。たとえ一時であっても。
「本は現実を選ばない。書くだけなら自由だ。批評はいつだって後から来る。酷評など聞かなければ意味がない。傷つかない。本の内容と作者の生き様が同じように評価されるわけじゃない。批評なんて結局言いたがりが勝手にやることだ。研究じゃない、理解したつもりになってるだけだ」
本当に本を理解しているのは作者本人だけ。
「読む側も書く側も自分勝手だ。勝手に書いて、勝手に理解する。好きなだけ勝手なことができる。それはすべて頭の中で決着するからだ」
空想を現実に持ち込めば、その時点で狂人だ。
「だけどな、読者は自分の意見を自分中だけに留めておくことができる。でも作者はそれができない。他人に見てもらわなければ世界が広がらない。勝手にやっているようで、実は他人が存在しないと成り立たない。そういう矛盾した世界なんだよ」
「それで何が得られるの？」
「一つだけ。自己満足だ。世界にたくさん自分の本を読んでくれる奴がいる。共感して、敬ってくれる。そう思える。それだけだ。物書きが求めるのはリアルじゃない。リアルの評価は何の意味もない。

金なんて一番眼に見える形でしかない。奴らが欲しいのはそんなものじゃなく、酔いしれることのできる世界だ。本に書いてそれが人前に出された時、既に作者の望みは叶ってるんだよ」

目の前に売れ残りが山積みになっても意味がない。そんな現実の問題など気にしてはいない。それが店頭に並んだ時点で、作者は敬われているという自己陶酔に浸ることができるのだ。

「自分をさらけ出してしか生きていけない。その時点で既に十分な狂人だと俺は思うけどね」

本に逃げる人間ほど虚栄心が強い。そのくせ現実の評価は求めていない。仮に認められても、彼らは既に空想の世界の住人となっている。

「遺書まで本に書く奴ってのもいる。あの世に逃げなきゃならないほど現実で生きていけない奴ら。そういう奴は現実という空気を吸っているだけで苦痛なのさ」

「君は？」

「俺？　俺はどっちでもないさ。俺も現実では生きていけない人間さ。ここにいる奴らのほとんどがそうであるように」

だがそれは逃避でも救済を求めたわけでもない。

「俺は傍観者だから。勝手なことをして勝手に慌ててる奴らを見てるだけで満足なのさ」

V－III　司書III

着眼点は悪くなかったと思う。「記憶の集まる場所」として図書館を連想したことには。しかし同じヒントを与えられた時に差が出る要因は二つ。

知識と柔軟。そのヒントを生かせるだけの知識、そしてそれを有効に活用する柔軟さ。しかしどんなに柔軟な頭があっても、知識という道具がなければ意味を成さない。本当に自分の頭が柔軟であることすら証明できない。

今現在の僕がまさにその状況にある。

本とは様々な言語で記され、様々な知識を与えてくれる。司書の彼はああ言ったが、それでも多くの人にとって他人の脳内というのは未知数の世界であり、知らぬことの方が圧倒的に多い。だから人は本から知識を得ることができるのだろう。

しかしその本を読むのにも知識は必要だ。そこに書かれている単語の意味、専門用語、そもそも言語がわからなければ意味がない。

その意味では僕はスタート地点にすら立てていないのだ。恥ずかしいことだが僕は生まれてから今まで一つの国の言語のみで生活してきた。学校で習った中途半端な知識などあてにはならない。そもそもここに書かれている文字は僕からすれば宇宙語に近い。いや、本当に地球外の言語があってもおかしくないのだが。

とにかく僕の知識量を試すどころか、それを証明するための方法すら僕にはないのだ。かと言って司書にこれをすべて訳してくれなど頼めるはずもない。

そもそも彼は傍観者であり、僕に協力する義務を持ち合わせていない。だから彼の助力は彼の気まぐれによってしか得られないのだ。

彼は本棚を睨みつけている僕の後ろでだらしなく本を読んでいる。やはりあの本のソファの上で。そして時々僕をのぞき見しておかしそうに笑っている。

「そんなに睨みつけたって読めないものは読めないさ」

とうとう口に出して僕をからかい始めた。

「一つくらい読めるものがあるかもしれないじゃないか」

「それをどうやって見つける？　ここにある本がいったいどれだけの量だと思ってるんだ？　百や千ではきかないぞ。俺だって見たことのない本があるかもしれない。その中からおまえが理解できる本をどうやって探す？　海に落ちた針を探すようなものだぞ」

まったくもってその通りだ。だから僕がやっていることは無駄としか言えない。無駄な努力というより無駄そのものだ。

「たとえおまえが読める言語があったとしても、まったく無意味さ」

「どういう意味だい？」

「そのままの意味さ。ここにおまえが読める本なんて一冊もないのさ」

それはまったくもって不愉快な言葉だ。僕は一応先進国と呼ばれる国で生まれ育ち、年齢に見合うほどの知識と読解力を持っているつもりだ。そして僕の使用する言語が世界にまったく通じないとは思わない。

しかし彼は笑う。

「この世界に必要なのは知識じゃない。理解すること、そして受け入れることだ。君の世界は完全に閉じられている。自分の中に何者も入れようとしない。だから何者も君の中に入れない、入ろうとしない。自分から入ってくれと言っておきながら扉を固く閉ざしている。そんなの失礼極まりないことだ」

「君の言っている意味がわからない。僕は拒絶なんてしてない」

「してるよ。君は本を読むことがただ字を視界に入れることだけと思っているんだろ？　そんなの本当の読書じゃないよ。言っただろ、本とは著者の知識の顕示する場所、つまり読者が作り出した世界だ。

世界はいつだって君に招待状を送っていてくれた。でも君は自身の扉を閉ざしたままだ。だから世界はいつも外に放り出されたままなのさ」
「世界が僕を受け入れないのではなく、僕が受け入れない？」
「そうさ。本が生み出す世界には飛び込むんじゃない。受け入れるんだ。君の中に入れてやる。そしてようやく君は本を読むことができる」
意味がわからない。まったくもって。
司書はそんな僕を見て大きなため息を吐く。
「君は本当の読書の仕方がわかっていない。鎧をまとったって読めるはずがない。かと言ってリトマス紙になってもいけない。本当に世界を受け入れるのに必要なのはスポンジだよ。まずは鎧を解きな、そしてスポンジになれ」
「スポンジ？」
「その意味がわかったらもう一度来たらいい。わからなければそのままさ。もっともわかったところでそれがおまえの役に立つ保証はどこにもないけどな」
そう言って笑い飛ばされた。彼は僕が思っていた以上に性格が悪いのかもしれない。

V－III　犠牲

司書から与えられた謎の課題。今のところその意味はまったくもって意味不明のままだ。倉庫に戻ってきた僕は固いベッドの上に寝転がっていた。それは不真面目に見えるかも知れないが、起きて考えようが寝て考えようが、出される答えにたいした違いはない。

だから結局僕は寝て考える方を選ぶ。

既に日が落ちてずいぶん経つが、一向に眠気はやってこない。思考でいっぱいの頭に眠気など入る隙はない。

リトマス紙だとか、スポンジだとか、鎧だとか、司書が言った言葉の台詞一つ一つを何度も繰り返してはその意味を考えた。

しかし何時間もかけたその成果は零だ。

ふと窓から空を見上げればとうに月が昇っていた。窓によって区切られた夜の闇に浮かぶ月と星々。それは一枚の絵のようにも見えて美しかった。

僕は重たい身体を起こしあげて首を左右に振り曇った思考を振り払う。

このまま考え続けても何も変わらないと思い、気分を変えるために外へと向かう。

倉庫を出て、村を出て、そこには霧深い森が広がる。一日のほとんどを霧に覆われた薄暗い森。白い霧が夜の闇さえ寄せ付けない。そこには白い闇が広がっていた。まるで何者も寄せ付けないかのように。

こんな夜中に散歩に出る人間など他にはいないと思えば、森の入り口にやはり以前と同じように彼女がいた。

彼女はやはり森の入り口にある岩に腰掛け、「こんにちは」と言

う。だから僕も「こんにちは」と返す。
以前そうしたように僕たちは一つの岩の上に並んで腰掛けた。
彼女はやはり笑っている。それしか持っていないような、仮面のように張り付いた笑顔。表情はいくつもあるからそれを見ていろいろなことを感じることができる。人の笑顔を見ればうれしいと思うこともあるだろう。
しかし彼女の笑顔にはそれがない。笑顔しか持たない彼女から得られるものは何もない。
こんな夜遅くに何をしていたのか聞こうと思ったがやめておいた。以前彼女には早朝に出会っている。今更何かを気にする必要もないだろう。
「最近何をしてるの？」
彼女は僕が最近になってせわしなく行動していることに気付いていたらしい。
「捜し物をしているんだ」
「何の為に？」
彼女は「何を」ではなく「なぜ」と訊く。
「目的を果たす為に」
「そんなことをして意味があるの？」
「その為に僕はここにいるんだ」
「そう、あなたの存在する意味はそれなのね。なら、それが済んだならあなたはここからいなくなってしまうのかしら」
残念がる様子でも寂しがる様子でもない。何かと問われれば、それは責めているように感じる。
「多分そうなるよ」
「多分じゃなくてそうなのよ。そしてあなたは私から大事なものを奪うのだわ」
「僕は何も奪うつもりなんてないよ」
「そのつもりがなくてもそうなるのよ。あなたが目的を達することによって、私は私の大事なものを壊してしまうのよ」

彼女の顔は相変わらず笑顔のまま。しかしその内にある感情がまったくそれに適していない。まるで彼女はそれ以外の顔を知らないようだ。いや、感情を表に出す術を知らないのかもしれない。
だけど間違いなく彼女は怒っている。そして僕を責めている。
彼女の言う大事なもの。それが何なのかはわからない。しかし、僕が目的を果たすことにより彼女の大事なものは失われる。そのことを彼女は怒っているのだ。
そしてそれを当然のごとく望まない。
「もしそうなるなら君はどうするの？」
「私はあなたに消えて欲しい。ここからいなくなって欲しい。でも私にはそうする資格も力もない」
「君は僕の目的を知ってるの？」
僕が尋ねると彼女はゆっくりと首を縦に、そして横に振る。
「詳しいことは知らない。ただ私が知っているのは結果だけ。あなたがここを去るとき私の大事なものが失われるということだけ」
「どうして知っているの？」
「私の根源に繋がることだから。それを失えば私自身も消えてしまうから」
彼女の依存は「他人」。ならば、彼女の大事なもの、望みとは。
「あなたが目的を果たせば私の世界も失われる。私はここにいられなくなる」
そう語る彼女の肩が震えているように見えるのはきっと気のせいではない。
「君は消えたくないんだね」
「そうよ。私は消えたくない。こんな生き方をして、こんな所に閉じこめられて、それでも私は私自身を失いたくない」
彼女の顔が自嘲しているかに見えた。
「おかしい？　こんな生きてるとも言えない姿で、それでも消えたくないなんて。笑いたければ笑えばいい。あなたは何も気付いていない。あなたがここに来たせいで私の世界は終わる。あなたは私や

他の人たちを犠牲にして自分の望みを叶える」
あなたなんて、
「あなたなんて、ここに来なければ良かったのよ」
そう言った彼女は涙を流しているように見えた。必死に訴えているのにその顔は笑顔のまま。まるで道化が泣いているかのようだ。
仮面の下で泣いている彼女を、僕は慰める術を持たない。

V－IV　釣り人III

倉庫に戻ると僕を待っていたかのように釣り人がそこにいた。いや、実際に待っていたのだろう。

彼は戻ってきたばかりの僕を自分の家に招待した。

一人分しかないカップを僕に差し出してくれる。この家は相変わらず一人分しかない。ただ一人の人間が住むためだけに存在する家。そこにいる僕は二人目の人間、招かれることのないはずだった客人。

カップに注がれたお茶はまだ温かいことを示すように天井へと湯気を立ち上らせる。彼の分の茶はない。ここに二人目のための食器は存在しない。食器だけじゃない。家具も、何もかも、ここには一人分しか存在しない。

今も彼は一つしかない椅子を僕に譲り、自分は机の端に腰掛けている。決して行儀が良いとは言えない。しかしそれを正す人間はここにはいない。むしろ僕は自分の椅子やカップを譲ってくれる精神に感謝している。

この光景はどこかで見たことがある。そう、僕が初めてここに来た日、そのまま。

僕という客人を一度招いた後であっても、彼は二人分の食器を用意しない。僕の存在に限らず、彼は一人分しか用意しない。

きっとこの先も、この家に二人目が存在することはない。

差し出された茶をありがたくいただく。特におかしなところも珍しいところもない、ただの熱いお茶だ。

僕が茶を飲むのを待っていたかのように彼は会話を始める。

「少しは進展があったかい？」

僕は少し考えてから首を左右に振る。

「方法ならすでに知ったはずだ。後は君がそれを実行できるかできないかだ」
「その方法の意味がわからないから進まない」
「君はいちいち翻訳してもらわなければ読む気にもならないのか？　言い方がうまくなかったかもしれないが、彼らの言った方法は間違ってない。君は自分で翻訳してすらいないんだよ」
「司書の彼も似たようなことを言っていた。鎧を脱いで扉を開けって。リトマス紙になるんじゃなくてスポンジになれって」
「彼らしい言い方だ。だが正しい」
「どういう意味？」
「僕に訊いてどうする。それでは意味がない。問題集に解答を写すようなものだ。それで知識が身につくはずがない」
　確かにその通りだ。自分で解かなければ意味がない。しかしそれは宿題の話だ。僕にも当てはまるのだろうか。
「君が得るのは今のところ疑問ばかりだろう。逆に僕は解答ばかり持っている。それが必ずしも良いとは限らないが」
「どうして？　知らないより知っている方が良いに決まってる」
「『知らない』から『知っている』に移ることはできても逆はできない。知らなかった頃には戻れない。僕はこの世界のすべてを知っている。だからこそ他の住人とは違う。むしろ僕は何も知らなかった頃に戻りたいよ。たとえいつか消えるだけの存在であっても」
「知ってしまって君は何が変わってしまったの？」
「僕の存在はこの世界のどの役割からも外れている。他の住人が知っているのはせいぜいこの世界の構造くらいだ。君が知るのはそれで十分だ。でも僕はその先を知ってしまっている。だから他とは違う」
「あの老女や研究者とも違うの？」
「違う。結局彼らもこの世界の一部でしかない。これ以上は知らない方が良い。だからこれは忠告」
　釣り人は言った。

「必要なものを得たならすぐにここを立ち去るべきだ。最初に言ったようにここは君がいるべき世界じゃない。君は彼らとは違う。そして僕とも違う。彼らのようにならないことを祈れ。そして、僕のようにはなるな」

それが、神に弄ばれた駒の忠告だった。

V－V　幸福論

思考を潜らせる。他のことはすべてすっかり忘れて、僕は一枚の白紙となる。その白紙に今まで得てきたヒントを並べてみる。ただの文字の羅列にしかならなかった。

それはヒントですらない。僕にとってそれはまだ問題文のままでしかない。この問題を解くためにまずこの問題を解けと言われているようなものだ。

基本ができなければ応用は解けない。だが僕が必要としているのは方法だ。これは外国語で書かれた説明書を読めと言われているに等しい。しかしそれを読むためにはまず言語を知らなければならない。その方法がわからない。

『答えは常に君の目の前に用意されている。それが見えないのは君が片眼でしか見ていないからだ』

釣り人はいつものように間接的な答えしか用意してくれない。

『君の世界は常に中途半端だ。必要なものと不必要なものが入り交じっている。だがそれは人として当たり前のことだ。正しいものだけを選ぶことなんてできないのだから』

僕とそれほど年の変わらない姿をしながら、彼の心は矛盾して達観しすぎている。

『君が欲しい答えは一つだけ。君が望む未来も一つだけ。だが答えを得たところで君の望む未来があるとは限らない』

わかってる。それを覚悟してここに来たはずなのだから。だが未熟な僕の心は貪欲だ。答えも未来も、両方手に入れたいと思っている。さらにその先まで。

『あなたは私たちの世界を犠牲にする。それはあなたがここに来たときから決まっていたこと』

少女が憎しみを込めた視線を僕に向ける。
『誰かが幸せになるためには他人が不幸にならなければならない。両者の幸せが並立することはない。あなたは自分の幸せのために他人を犠牲にすることを選ぶわ』
それは予言でも警告でもなく、確信。
『ひどい人』
恨みがましく、まだ僕をけなす言葉を吐き続ける少女の眼に、涙が見えた気がした。
『この世界の幸せって何かしら』
静かに老女は問う。
『他人が入ってしまえば壊れてしまう幸せもある一方で、他人がいなければ成立しない幸福も存在するわ。それはある意味その他人を縛り付けている、犠牲にしていると言えないかしら』
でも、と老女は続ける。
『この世界に未来なんてないもの。あるのは常に今だけ。明日も一年後も百年後も、ただ今という時間を繰り返しているだけに過ぎない。そしてそれを保つことが私たちの唯一の道。だけどそれを選んだのも私たち』
誰かを犠牲にしてでも今の自分を保つことを選んだ結果。
『美しい薔薇を咲かせるには他の薔薇を間引かなければならない。それは人間の関係性にも似ている』
学者は言う。
『薔薇は美しく咲くことを使命として生まれてくる。しかしそのために他を犠牲にすることを決めたのはそれを愛でる人間。さて、薔薇は何のために美しくあろうとしたのだろうか』
相変わらず彼の話はわかるようなかわからないような、判断が付かない。
『君という花を咲かせるために犠牲になる花たち。しかし薔薇と違いそれを選択したのは君自身。薔薇を間引いたのは君自身。なら君は何のために美しくなろうとした？』

僕は今まで何を犠牲にし、これから何を犠牲とするのだろうか。
『考えることはねぇさ。自分を生かすために他人を犠牲にすることは生き物みんながしている。ただ幸福のために生きようとするのは人間だけだけどな』
司書はいつものように不真面目な笑みを浮かべる。
『幸福とは他人の犠牲の上に成り立っている。お前が求める答えは犠牲の果てに存在する。だがその先にお前の幸せが存在するかはそのときになってみなければわからない』
約束されない未来・幸福のために僕は答えを求める。
『お前が考えているのはあるかわからない幸福のために他人を犠牲にしていいのかということ。だがそんなこと当たり前のことだ。考えるまでもない。絶対に約束された未来など存在しないのだから』
手探りで前に進むことは未来を生きる人間には当たり前のことだ。
『この世界は今で止まっている。だから君のように未来のために生きることのできない人間は存在しない。君以外に』
未来ある者の幸せと今に捕われる者の幸せは違う。
『君が悩む必要などない。君は何のためにここへ来た？』
僕がここに来た目的は……。
『君は、何のためにここにいる』

V－VI　虜囚

それは夢だったのかもしれない。都合の良い、僕が望んだ夢。

「君は何のためにここにいるの？」

僕の不躾な質問を、釣り人は少しだけ眉を上げた。でもそれはすぐに元に戻った。そういえば彼の表情はほとんど変わらない気がする。

それはあの少女のような微笑みしか映さない仮面とは違う。表情がないと言った方が早いかもしれない。

だが、そこに冷たさはない。ただ感じるのは絶対的な平等。彼は誰に対しても情を抱かない。だから等しく公平なのだ。

「今まで会ってきた人たちは必ず何かの執着を抱えていた。そうすることで自分の存在を保ってる。でも君にはそれが感じられない。彼をこの世界に立たせる理由は何なのか。他の住人のような執着でなければ、僕のような目的でもない。別の何かが、この世界に留めている。

「そんなことを知ってどうするんだ？　前にも言ったけど、知らない方が良いこともあるんだよ」

「うん、でも何となく思ってしまったから」

「知りたいと思った？」

「うん」

釣り人は大きなため息を吐いた。

「君は駒が盤上に立っていることに疑問を持つのか？」

「駒？」

以前にも同じ様なことを言っていた気がする。

「駒の仕事は与えられた役割を果たすこと。他に理由はない」

「君は自分の意志でここにいるのではないの？」
「それは僕の意志だ。役割を果たすのはここにいるために僕に与えられた条件だから」
「条件？」
「これ以上は聞かない方がいい。何度も言うけど、知らない方が良いこともある。望んで駒や虜囚になる必要はない」
「君は囚われているの？」
「違う。僕はある意味誰よりも自由だ。君よりも。ただ、自由だから孤独なんだ」
　自由だから不幸なんだ。
「自由は不幸なの？」
「君はいろんなものに束縛されて生きている。それはほとんどの人間の誰もが。でもそれは加護でもある。少なくとも君達には決まった誕生と終わりが与えられている」
「君は？」
「僕は自由だ。だから何者にも属さない。束縛されない。だから居場所がない。ここに僕がいるのは僕のワガママだ。そしてその意味を君が知る必要はない」
　知れば不幸になる。そう彼は言った。
「僕は虜囚だよ。知らなくていいことを知ってしまった、自由という名の虜囚。僕の見る世界は誰とも違い、僕の言語は誰とも合わない。ただ一人別の者となってしまった」
　釣り人は上を見上げる。つられて上を見上げた。天井だけが広がり、何もなかった。それでも彼は視線を天へと向けたまま。
　彼は何を見ているのだろうか。天井のさらに上、空のさらに上。
「――天は何処に？」

Ⅴ－Ⅵ　虜囚（後書き）

短くなりましたがいったんここで切ります。

幕間

紙の臭いがする。籠もった空気が扉を開けると同時に飛び込んでくる。

ここへ来る度に普段はほとんど動かない顔を顰める。

僕は誰か。釣り人、そう呼ばれる登場人物。だけど本当は違う。僕は登場人物ですらない。ならば、紙の上に立つインクの僕は誰なのか。盤上から飛び出した駒はどうなるのか。

大地の加護を失った者、神の祝福を失った者、その行く先はもはや神にすらわからない。自由と引き替えに得た不確かな未来。

一歩足を踏み出すたびに水の上を歩くようなふわふわとした感触。不安、誰ともつながらない孤独。先の見えない道は自ら選んだはずなのに、手すりのない階段は想像しなかった恐怖を与える。

それを暗示するかのような暗い部屋。机の上を照らす照明以外、光はない。

彼は、その机に向かってひたすらペンを描き続けている。何を書いているかなどわからない。他人が見ればそれは壮大な物語かもしれない。他人の目に触れる価値もない駄文かもしれない。たとえ僕たちにとって神に等しい存在であっても、現実からすれば、物語を描く数多くの人間の一人に過ぎないのかもしれない。

「珍しいな、お前から訪ねてくるなんて」

「会いたくもなかったよ。用事がなければ来なかった」

彼はぐるりと椅子を回転させその憎たらしい顔をさらした。不機嫌を表すように眉間にしわを寄せる僕をおもしろそうに眺める。

その顔に特徴を挙げても無駄だ。顔だけではない、その服装も、この部屋自体にも、説明する意味はない。全体的に洋風の書斎と言える。彼自身が着ている服も、ヨーロッパの貴族を思わせるかのようなシックな洋服。椅子に優雅に座る姿は貴族の若様を思わせる。

人をあざ笑うかのような笑み、東洋人を思わせるような黒髪、嵐を思わせる灰色の瞳。特徴はいくらでもあるのに、それはまったく意味をなさない。
この姿もこの部屋も彼がイメージした仮の姿に過ぎず、さらに言えば年齢も性別すらわからない。こんなのただのポーズに過ぎない。それっぽく、でしかない。
「まあ、来るとしたらそろそろと思ってたよ」
彼にはすべてお見通しというわけだ。知らないことはないかのように。
「それで？　ここへ来て何の用だ？」
「訊く必要もないのにそれを言うのかい？」
「お前は俺を全能の神と勘違いしてないか？　俺が何でも知っているのは自分のことだけだ」
ただそれだけだ。
彼は言う。俺の世界の一部に過ぎない世界などたいした価値を持たないと。だから簡単に切り捨てることができるのだと。彼にはその世界で生きる者たちの命の尊さを記すことはあっても理解はしない。
「お前は俺という存在を知り、俺の呪縛から解放されることを望んだ。だが結局お前は箱庭の世界を選んだ。ゴミ捨て場ですらない。存在すら忘れていた者たちに最後の場所を、お前は望んだ。何の意味もない。消える直前に拾い上げ、消えれば捨てる。その繰り返し。そのために作った世界だったが、もう時間切れのようだ」
「彼をあの世界に連れ込んだのは君なのか」
「あそこは望まなければ入れない。俺は何もしていない。あの世界に関してはお前に一任しているだろ？　だが、結局忘れられた存在はいずれ消えゆく。それを少し長らえさせているだけじゃないか」
「わかっている。これがただの自己満足、いや満足にすらならないことも」
失ったのは呪縛と加護。始まりがあり終わりがあるという保証。

それすらもない自分は何処へ行き、何処までいけば終われるのかすらわからない。
僕の大地は何処にもない。そして天は、ここにある。
「記す必要もない物語。価値もない登場人物たち。そいつらに原稿の裏でもいいから居場所を作って欲しいと言ったのはお前だ。何処にも所属できないお前は、ただ他人に居場所を与えることに満足してるのか？」
違う、僕は――――…、
「意味が、欲しかったんだと思う」
僕がここにいる理由、ここにいる意味。自由を得たくせに、縛り付けるものが欲しかった。怖くなった。解放されることが。
「本当につまらないな、お前の物語は」
彼は鼻で笑った。
「書く価値すらない。だから今まで放っておいてやったんだ。最初からいずれ壊れていくものだと忠告したものだ。一度忘れられた存在が再び日の目を見ることはない」
それと、
「言ったはずだ。俺は神ではない。ただの人間かもしれないし、お前たちと同じように誰かの手のひらの上で遊ばれている存在かもしれない。だが俺は自分が自分である限り、それに不満はない。お前みたいに無駄な自己主張はしない」
だから、
「お前が自由になりたいと望んだからそれを与えてやった。なのに今は捨てた呪縛が惜しくなっている。だがそれは二度と手に入らない。なぜなら、呪縛は無知なる者にしか与えられず、知ってしまえば無知には戻れないからだ」
だからお前は原稿の上でふらふら揺れ歩くことしかできないんだ。
「心配しなくてもあの世界が消えてもお前が消えることはない。そもそもあの世界の一部ですらないのだから。それとも、お前にとってそれは不幸なのか？」

「わからない」
知ってはいけないことを知ってしまった人間の末路。そのうちの一つが今の僕。
「元々不安定な世界だったんだ。そこに一本釘が打たれればそれだけで崩れる」
ただ、それだけのことだ。

僕が得たかった自由。失ってしまった呪縛。目的もなく、ただ存在するだけ。水中で揺れる釣り針のように、ただ当てもなく揺れるだけの僕。
誰も僕の釣り針をつかんではくれないのだ。

?―?　罪

終焉の兆しは、もう既に存在していた。そして終焉は、あっという間にやってきた。

倉庫の荷物が増えなくなっていた。ただ一方的に減っていった。釣り人がまた配っているのではない。彼はあの日僕と会ってから一度もここには来なかった。

持ち込まれる荷物はない。運び出される荷物もない。それなのに、朝目を開ける度にガラクタと呼ばれていた物達は消えていった。

最初に来た日、天井近くまで積み上げられ、一階すべてと二階の半分以上を占めていた荷物の山はだんだんと低くなり、僕が歩けるスペースはどんどんと広がっていった。

なぜだろう。疑問に思ったのは荷物が減ることとともう一つ、釣り人のことだ。

彼はそれまで日課のようだった配達をやめ、荷物が減っていることにも関心を持たず、一日のほとんどを森で過ごす。

ほんの数日前までは森や湖で拾ったガラクタを倉庫に運んだり、村の家々をまわっていたはずなのに、ウォルガは繋がれたままで持って行くのは釣竿のみ。そして帰ってきても朝と何も変わらない。釣竿の他には何も持っていなかった。

何度か声を掛けたが意味のある返事は得られなかった。いつもと変わらぬ表情のはずなのに、どこか落ち込んでいるような、虚ろな目に見えた。

それは感じていたのかもしれない。迫り来る終焉を。
現在しか存在しないこの世界にやってくるはずのない終焉。それは先のない、消滅を意味していることをこの時の僕は理解していなかった。
そして彼が誰よりもそのことを嘆いていたことも。
気付いていたのは彼だけではない。村の住人達も、音もなく近づいてくる終焉を感じ取っていた。

日課となっていた図書館通い。たいした成果もなくただ繰り返すだけの日常。そこに結果が見えたのは、それが時機というものだったからなのかもしれない。
僕の未来は、常に僕の望み通りには動かず、ただシナリオ通りに動いているように感じられた。
「スポンジにはなれたか？」
ここに来る度に一度は問いかけられる。しかし僕は常に「否」としか答えることしか出来ないでいた。そんな僕に興味をなくしたかのように、司書は本に没頭した。
そんな変わらない問答に変化が起こったのは本当に前触れもないものだった。
自分の目的の為に何かを犠牲にすること。それを彼女に突きつけられた時からずっと考え続けていた。僕以外の住人達には未来がない。あるのは今現在のみ。彼らはここに存在し続けることが幸せ。それ以外の幸せを求めることも、得ることもできない。
未来の幸福を得るためには犠牲が必要。すべての幸福がそうやって築き上げられるとは言えないが、少なくとも僕のあるかわからない未来はそうすることでしか得られないらしい。
僕は何のためにここにいる？
目的の為だ。その為に他人を犠牲にすることは罪なのか。
恐れているのは罪なのか、それとも断罪されることなのか。僕は

目的の為に何かを犠牲にする覚悟があるのか。その罪を受け入れることができるのか。
今の自分を保とうとしていたのは彼らだけじゃない。僕自身もだ。他人を犠牲にするということは大なり小なり他人を受け入れるということ。
僕は何も感じないような振りをして、実は他人を受け入れることを拒んでいた。そうすることで自身が損なわれることを回避しようとしていた。
他人を受け入れれば僕は変わるかもしれない。それは怠惰に現在という波を漂うことの放棄。先の見えない未来に足を踏み入れるということ。
犠牲は他人だけではない。僕の安穏とした現在も犠牲にするということ。未来に足を踏み入れた時点で今現在は過去となり、二度と戻ることはできない。
その覚悟が僕にあるのか。
ある、としか言えない。それ以外に僕の目的が果たされないのなら。ここに来た時点でそれしかないと分かっていたはずなのだから。
すべてを犠牲に、他人も自分も捨て去り、その罪を受け入れよう。そうすることでしか見えない未来、解答があるのなら。
これが、スポンジになるという意味だというのなら。
その時、今まで開いたままの読めない本に文字が浮かび上がる。僕がよく知る言語で、見たことのある絵が、そこに描かれていく。
そして僕の視界は光に包まれる。

「いってらっしゃい」
最後に司書の声が聞こえた。
そして僕は光に飲み込まれる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9411c/

釣り針の先には

2011年11月21日20時07分発行